

2-2.東海道を舞台にした信仰・祭礼等に見る歴史的風致

(1)はじめに

岡崎は、地理的に交通の要地として、^{やはぎがわ} 矢作川・^{おとがわ} 乙川の水運があり、また、古代からの主要街道である東海道と北へ上る^{あすけ} 足助街道(中馬街道、塩の道)、三河湾へと続く吉良道など多くの街道が交差している。とりわけ、東海道は岡崎の中心部を含み延長約20キロメートルと市域を南東から北西に貫く。中世より東西交通の要衝として宿が置かれ大いに賑わいをみせ、人、物、情報や文化の交流が活発に行われてきた。近世には城下町、宿場町、門前町が発達し、街道を通じて様々な民間信仰がもたらされ、街道沿いの町々では、秋葉信仰や^{ごす} 牛頭天王¹信仰等の習俗・文化が根付き、民衆の間で広がり盛んとなった。東海道は交通の要衝であったため、各地に多様な習俗や文化が根付き、それらに基づく祭礼が生まれてきた。現在も、地域住民による清掃や保護活動によって、松並木や一里塚、歴史的な風情を残すまちなみなど、当時の面影を伝える東海道の景観が守り続けられている。

こうした東海道を舞台として、地域で大切に受け継がれてきた祭礼は、時代に応じて形を変えながらも毎年行われ、歴史と伝統を今に伝えている。

表2-2-1 小風致²の概要

小風致	建造物	活動
秋葉信仰(秋葉祭)に見る歴史的風致	秋葉社と秋葉山常夜燈	秋葉祭
	秋葉堂	秋葉山大祭
東海道を舞台にした祭礼等に見る歴史的風致	本宿神明社	本宿神明社の祇園祭
	山中八幡宮	山中八幡宮のデンデンガッサリ
	津島神社	津島神社の天王祭り
	称名寺、十王堂(藤川町) 地蔵堂(大平町)	地蔵祭り
	矢作神社	矢作神社の祭礼
	藤川宿 (旧野村家住宅(米屋)、 旧平岡家住宅(銭屋)等)	地域団体によるまちづくり活動

¹ 仏教における天部の一つ。山城国東山や播磨国広峰山に鎮座して祇園信仰の神(祇園神)ともされ、現在の八坂神社(京都府)にあたる祇園感神院から勧請されて全国の祇園社、天王社で祀られた。

² 複数の歴史的風致が密接な関係を持つ場合、それらをまとめて一つの歴史的風致とし、前者を「小風致」、後者を「大風致」とよぶ。

(2)東海道の歴史と秋葉信仰

①東海道の歴史

東海道は、江戸日本橋を起点とし京都の三条へと至る街道で、中山道・甲州道中・奥州道中・日光道中とともに江戸時代の五街道と称される。本市においては、古くからの街道としてもっとも市民に親しまれ、街道沿いにはその歴史を物語る史跡や建造物が数多く残されていて、歴史と伝統・風情を感じさせる市街地を形成している。

ア.古代

「東海道(うみつみち)」(『日本書紀』)と称される街道の形成は、大和政権が東方へと支配権を及ぼし始めた5、6世紀以降のことで、7世紀後半以後に次第に整備がなされていったと推定されている。鳥捕(宇頭町付近)・山綱(山綱町)を通るのが古代の東海道の大略の道筋と比定されている。

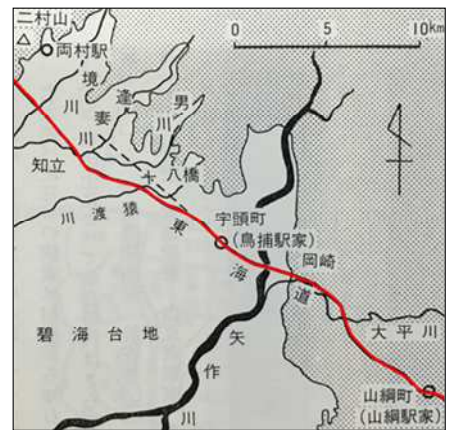


図2-2-1 古代三河の駅路

イ.中世

鎌倉幕府の成立によって東海道の性格は大きく変化する。2つの政権所在地を結ぶ道は、政治・軍事のみならず、経済・文化的にも国内最重要の幹線「京鎌倉往還」となった。『太平記』には、矢作川の渡河点が3か所あったことをうかがわせる記述があり、東海道(鎌倉街道)もいくつかの道筋が推定されている。大永7年(1527)には菅生川(乙川)南岸の明大寺が岡崎で、東海道も同地を通過していたことが『宗長手記』で確認できる。道筋が菅生川(乙川)北岸に移るのは16世紀末の岡崎城主・田中吉政時代である。

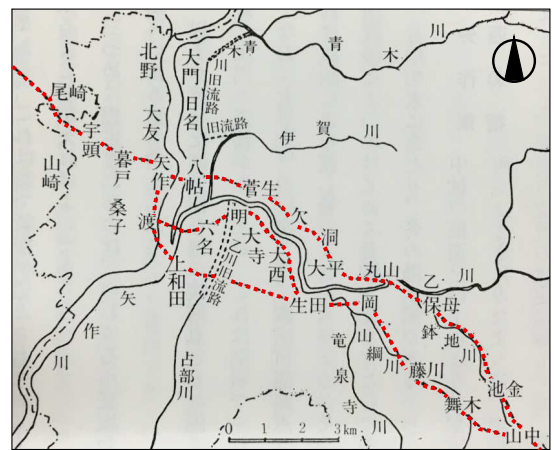


図2-2-2 中世の東海道(鎌倉街道)推定図

ウ.近世

慶長6年(1601)、徳川家康公が開いた江戸幕府によって、東海道はいわゆる五街道の第一として、江戸と京を結ぶ宿駅制度が定められ、幕藩体制を支える大動脈となった。これにより、東海道の江戸品川宿から藤川は37番目、岡崎は38番目の宿となった。岡崎藩主・本多康重が慶長14年(1609)に水害で疲弊した八町村の町人を城東の台地上に移して伝馬町を新設

し、ほぼ道筋は固定した。城下廻り以外の市域での道筋は、天正 10 年(1582)に甲斐から凱旋する織田信長のために家康公が道路改修を行っているの、それらを整備して近世の道筋が固定したと推定されている。以後、文化 3 年(1806)の『東海道分間延絵図』、天保 14 年(1843)の『東海道宿村大概帳』により道筋をたどってみると、次のとおりである。本宿村・山綱村・舞木村・加宿市場村・藤川宿までは断層に沿った谷筋を東海道が東西に走っている。本宿村内には家数 110 軒、山綱村内の道幅は 2 間半から 3 間半で家数は 9 軒のみであった。舞木村内の道幅は 2 間半から 3 間半で家並は全長 1 町³の道を西進する。

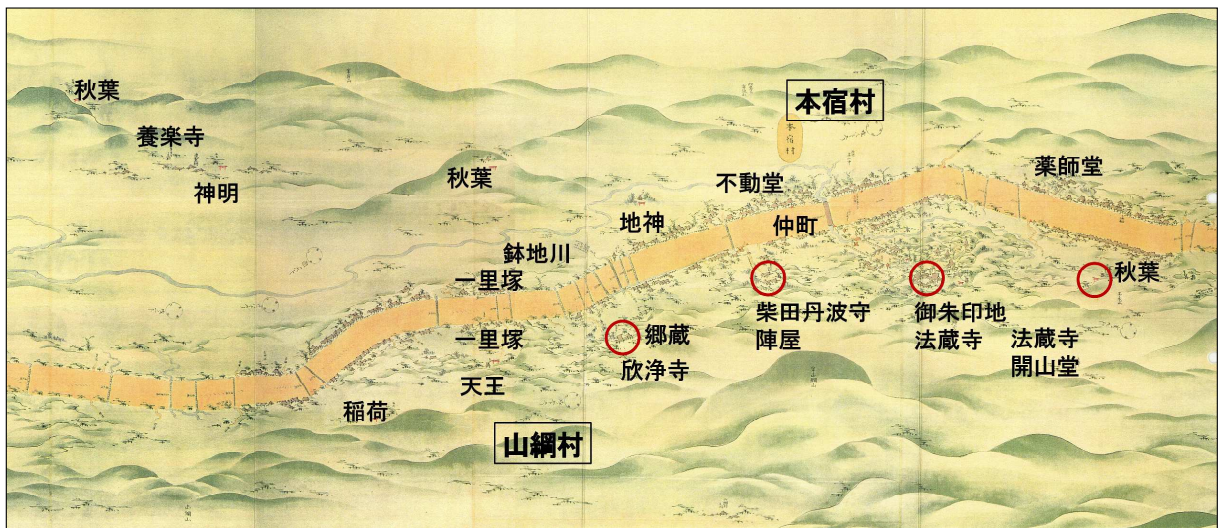


図2-2-3 東海道分間延絵図(本宿村・山綱村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

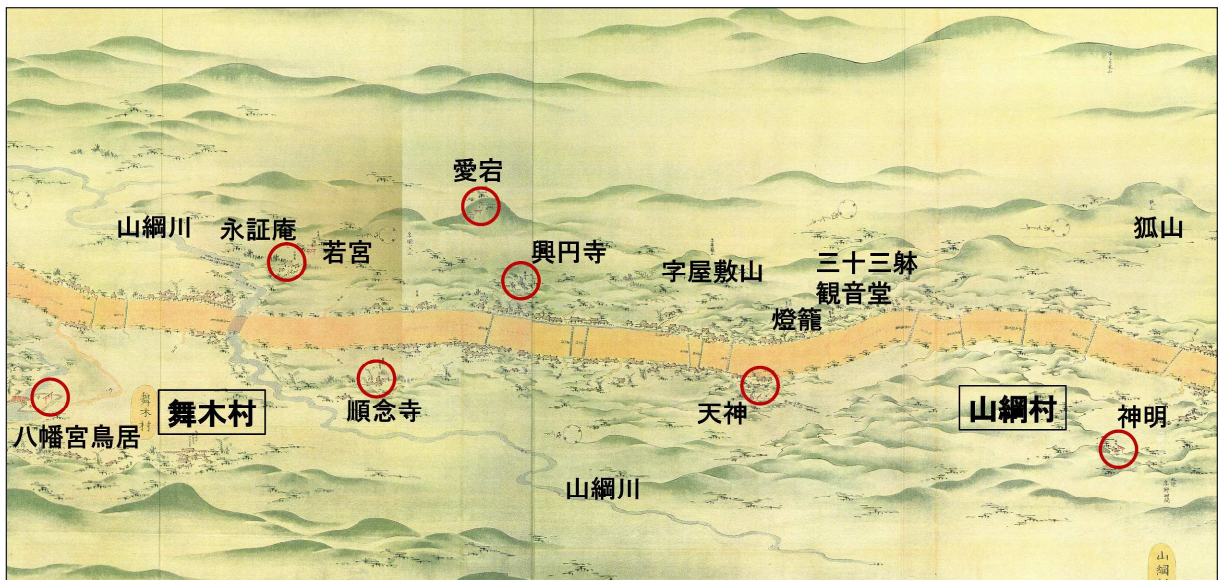


図2-2-4 東海道分間延絵図(山綱村・舞木村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

続いて広義の藤川宿の東入口となる加宿市場村に至り、東町・中町・西町・一里山の順に藤川宿内の道幅 2 間半で全長 36 町 5 間となっている。宿はずれの松並木を過ぎると岡村地内に入る。

³ 町(ちょう)=60 間=約 108 メートルの長さ。

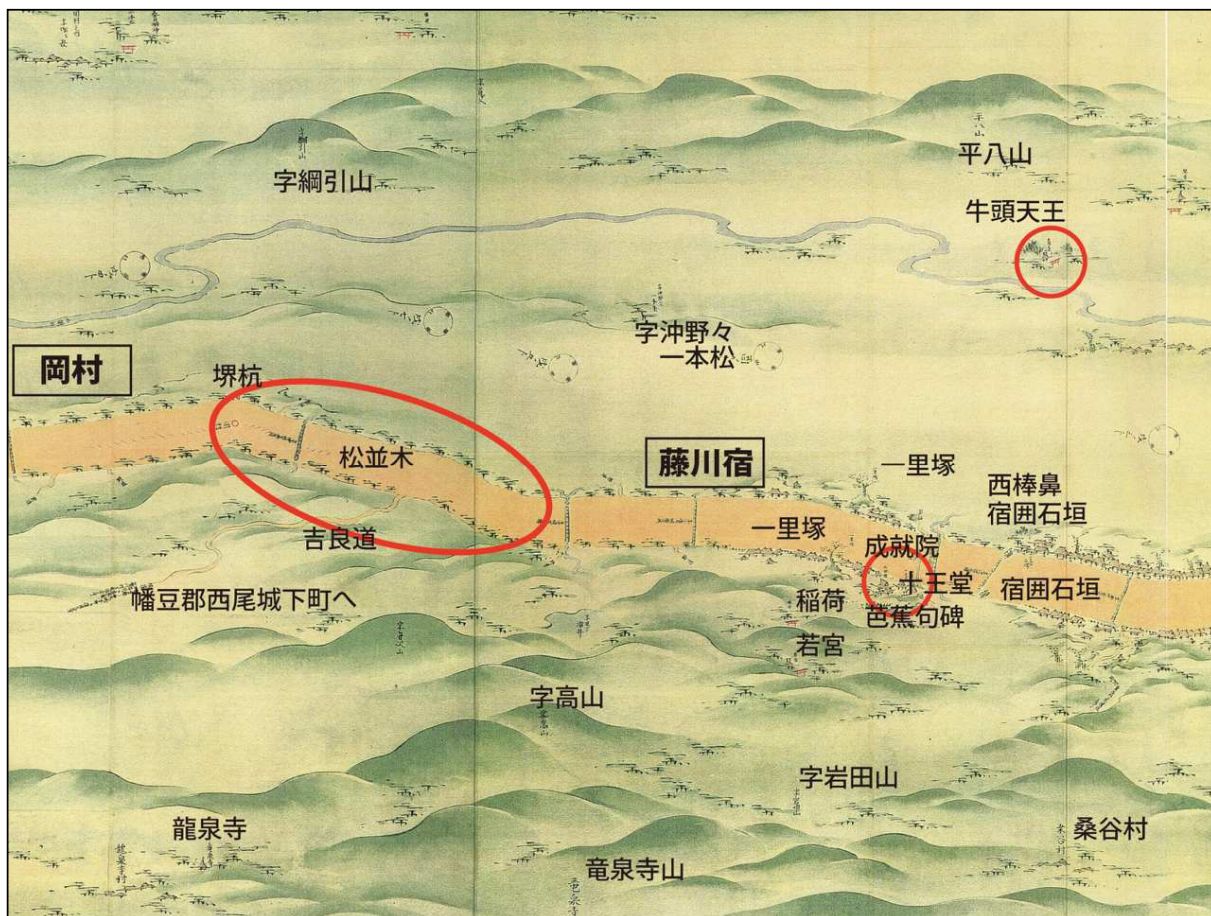
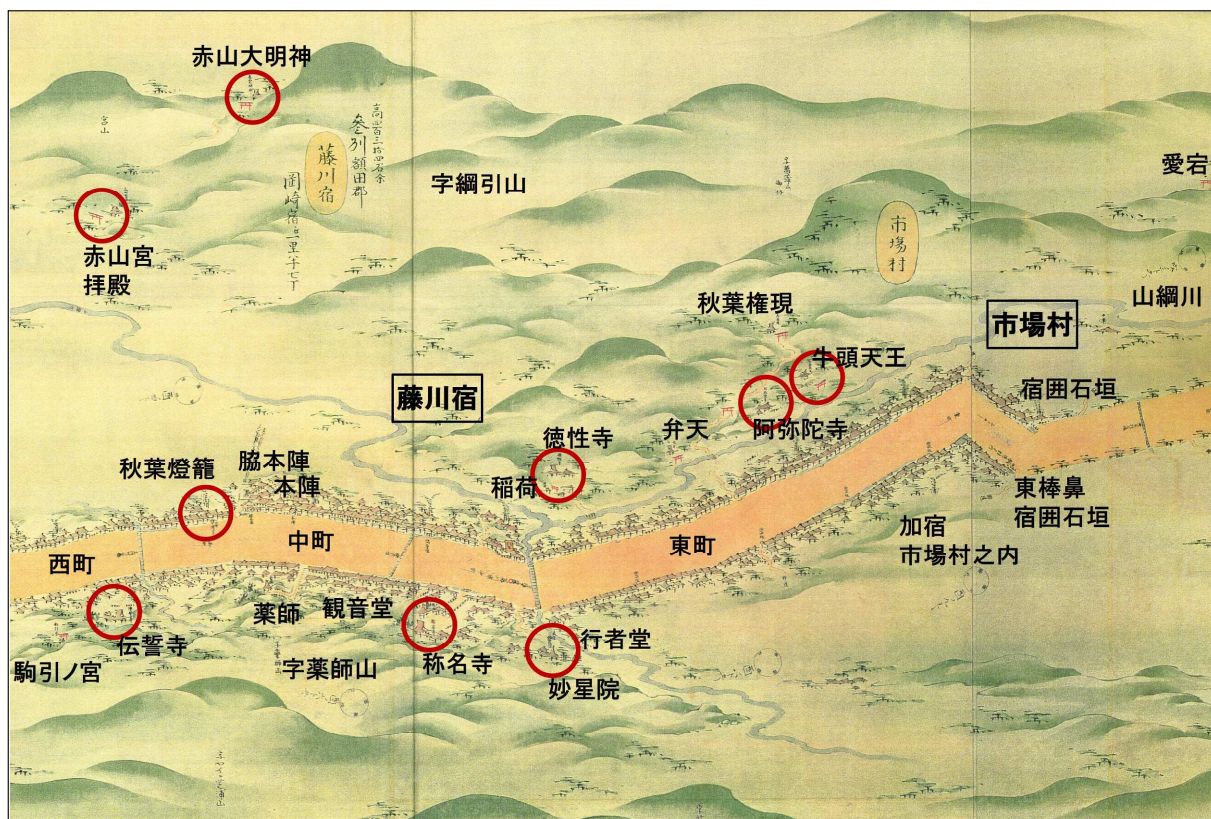


図2-2-5 東海道分間延絵図(藤川宿)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

岡・生田しょうだ両村地内の東海道は山綱川・竜泉寺川・乙川の各氾濫原地帯をやや北東方向に進行する。家並は岡村が4町16間、生田村が3町29間であった。大平川(乙川)の板橋・大平橋を渡って大平村・西大平村おおひらに至る。絵図でみると、西大平藩大岡陣屋東番所までの家数は東西で46軒の百姓家が確認できる。西大平村に入る直前で東海道は南北から東西に方向を変えている。西大平村は1万石大岡家の陣屋所在地にふさわしく南北両側に58軒が家並を形成していた。西大平藩陣屋の近くに大平の一里塚が左右榎木立として描かれ、家並が若干続くと南側に西大平藩西番所に至る。西番所から松並木を過ぎると更沙川の筋違橋の右端に「従是岡崎領分かけ」の石碑が立ち、岡崎領欠村となる。



図2-2-6 東海道分間延絵図(岡村・生田村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

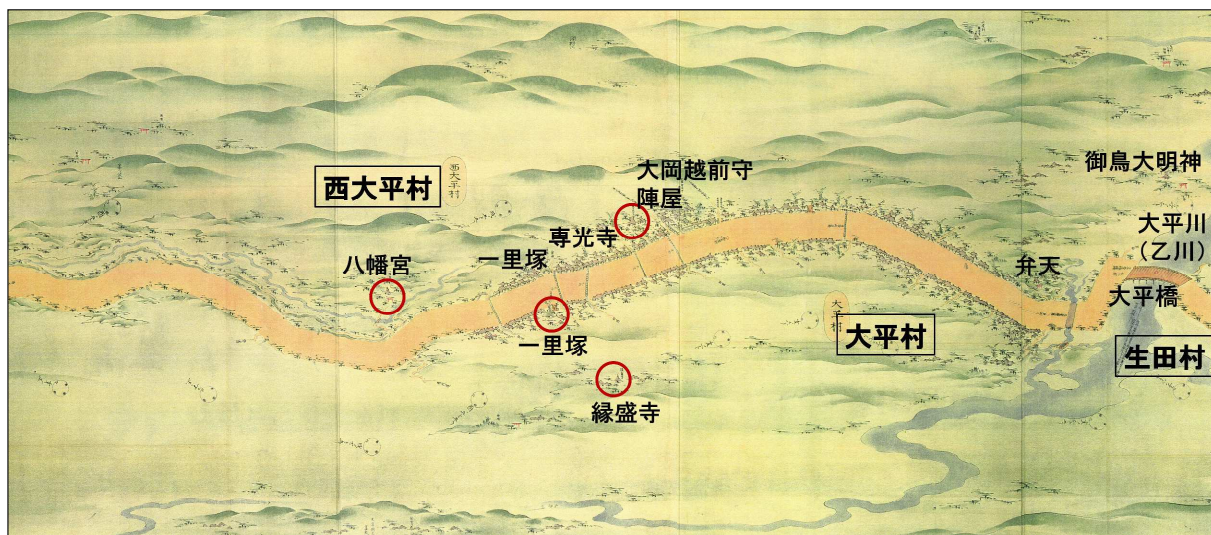


図2-2-7 東海道分間延絵図(生田村・西大平村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

欠村は広義の岡崎宿の東入口である。^{なぐりまち}投町から始まり両町・伝馬町・籠田町・連尺町等を通り、「町数5町4間27曲」の屈曲した宿場兼城下町を材木町・下肴町・田町・板屋町で西の総門を出て、伊賀川の松葉橋・早川の亀屋橋を渡り終えて岡崎町廻りが終了する。

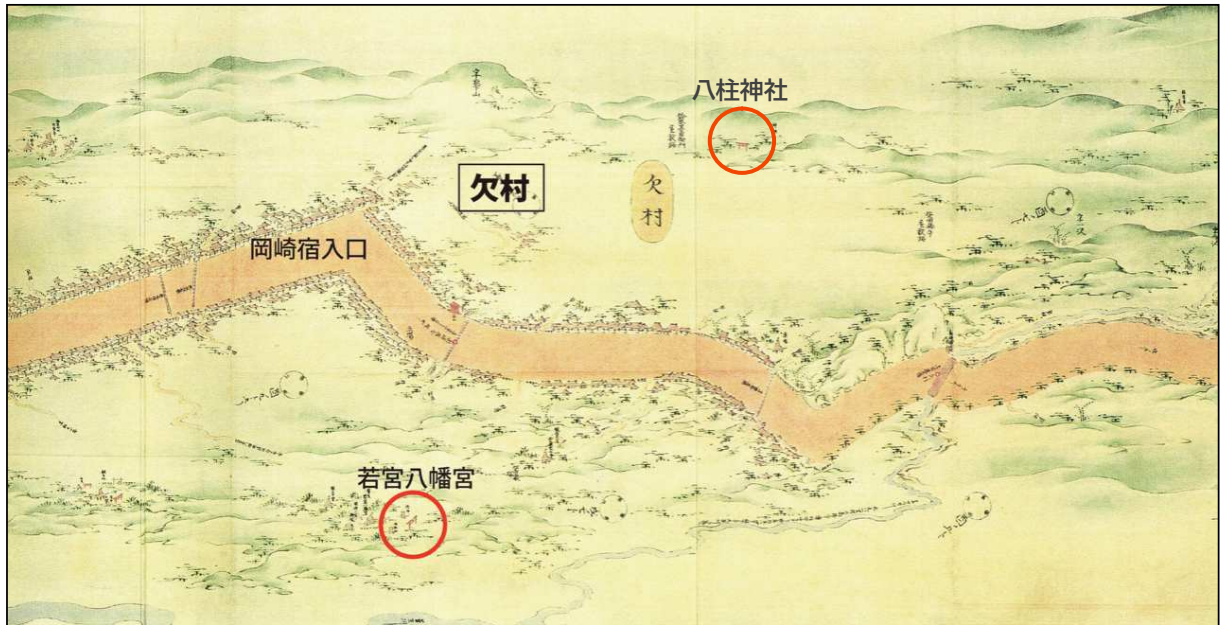


図2-2-8 東海道分間延絵図(欠村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

矢作村内の道幅は4間と広く、往還全長は14町35間で家数は250軒以上であったから、藤川宿よりも往還通りの家数は多かった。

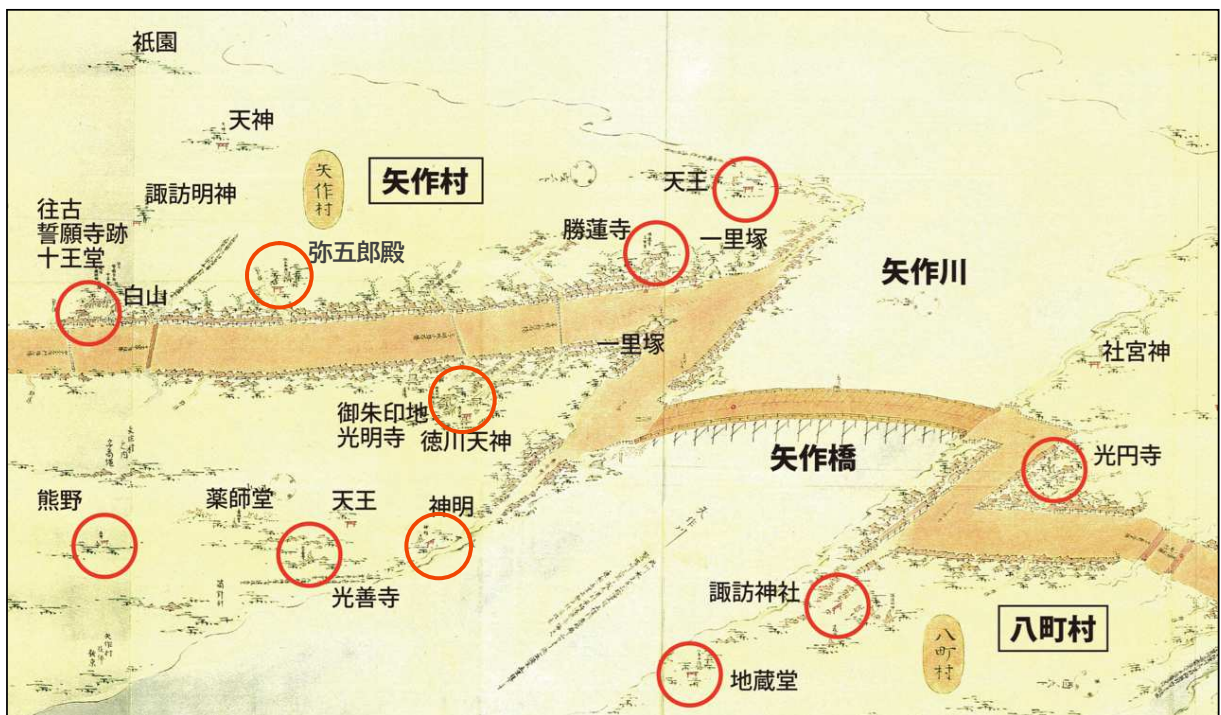


図2-2-9 東海道分間延絵図(八町村・矢作村)(文化3年(1806)完成) ※赤丸内は現存寺社等

エ.近現代

近代に入ると東海道に代わって鉄道が主役となり、東海道の役割も変化した。大正期に入ると自動車の発達により国道の整備・改修が進められた。市内を通る東海道は、曲折が多く、繁華街を通る部分は道幅が狭く、拡幅が困難なこと、経費が高くつくことなどから、新国道は、東海道とは別の道筋がとられた。戦時中は整備・改修を一時中止、未開通区間は昔の東海道のままであった。戦後、本宿・矢作地区の整備が昭和31年(1956)に完了し、ここに旧東海道の幹線道路としての役割は国道1号に変わった。東海道と並行して新道が建設された部分、本宿・舞木・市場・藤川・美合^{みあい}・大平・矢作の各町等は、寺社や歴史的建造物が残るまちなみとなっている。これに比べて、並行する新道が作られなかった部分は、まちなみとしての歴史は古く、記録も残るものの、現在は交通量が多い幹線道路となっている。しかし、歴史的な場所として東海道沿いのまちなみの中では重要な地点であることには変わりがない。旧道は現在も生活道路として利用されており、道筋に変更はあるが、昔の街道筋をたどることができる。藤川・美合・大平の各町等には現在も松並木が残っており、東海道の面影を残している。

②秋葉信仰

江戸時代には街道を通じて様々な民間信仰がもたらされ、伊勢信仰や秋葉信仰が民衆の間で広がっていった。三河地域においては、特に秋葉信仰が盛んで、現在も街道沿いの町や村の中心及び街道の三叉路等に建立された常夜燈が現存しており、町内会等・講⁴により祭礼が連綿と続き、信仰の対象となっているほか、現在も町内会組織等を通じて秋葉山のお札^{みだ}を代参により毎年求め、台所等で祀る風習が東海道沿いを中心に市内全域に広がっている。

遠州秋葉山(浜松市)に発する秋葉信仰は、修験者三尺坊が神仏混淆^{こんこう}の秋葉三尺坊大権現として祀られるようになり、火の神を祀ることから、民間では火伏^{ひぶせ}の神として信仰されてきた。貞享2年(1685)にこの三尺坊像を神輿に担ぎ、西は伊勢国関・坂下へ、東は島田・藤枝まで村送りをした「貞享の秋葉祭」により東海道筋に秋葉信仰が一気に広まった。以降、天明期(1781~1789)に京都の大火事、浅間山の噴火、大飢饉と災害が相次いだため、秋葉信仰が一層盛んになり、町・集落や同業者有志で講^{ようはい}が結成され、秋葉山遥拝のために常夜燈が建てられたとされる。特に、関東・中部地方を中心に、各地で秋葉講が組織され参詣することが流行した。さらに慶応3年(1867)の「ええじゃないか」では、秋葉山おかげ参りが発生したり、各地の秋葉社や常夜燈で秋葉祭が催された。

⁴ 江戸時代の庶民にとって秋葉山へ参詣するには多額の旅費がかかり、経済的負担が大きかった。そのため、秋葉講という互助組織を結成し、毎年交代で選出された講員が積み立てた旅費を使い、組織の代表として秋葉山へ参詣していた。

(3)秋葉信仰(秋葉祭)にみる歴史的風致

①はじめに

岡崎における秋葉信仰の始まりは、延享元年(1744)建立の甲山寺多宝坊の秋葉三尺坊(明治14年(1881)に極楽坊へ移築)に端を発し、秋葉大権現燈籠が延享4年(1747)に建立されている。東海道沿いの各地と同様に、岡崎でも地縁組織を中心に講が結成され、秋葉山常夜燈を建て、代表者が東海道や脇街道を通り、遠州秋葉山へ代参してお札を貰い受けてきた。寛政5年(1793)の岡崎からの参詣記である『秋葉山道中記』(伊藤家文書)には、行路として東海道を東に進み浜松から北上し、秋葉大権現にて祈祷と札を受け、帰路は山道部の道を西に進み鳳来寺を参詣して南下し、御油(豊川市)から東海道沿いに戻るコースが記されている。

伝馬町の記録(杉山家文書)には、秋葉講は明治期まで「寛政講」と呼ばれ、享和2年(1802)には、秋葉山にて大札3枚、御姿3枚、火防の札30枚を受け、講仲間の初穂料100疋を納めていたことが記されている。享和・文化年間(1801~1817)には毎年1月、5月、9月に2人ずつ遠州秋葉山に参詣していることが記され、大札は常夜燈の祠等に納められ、火防の札は各戸へ配布されたと考えられている。

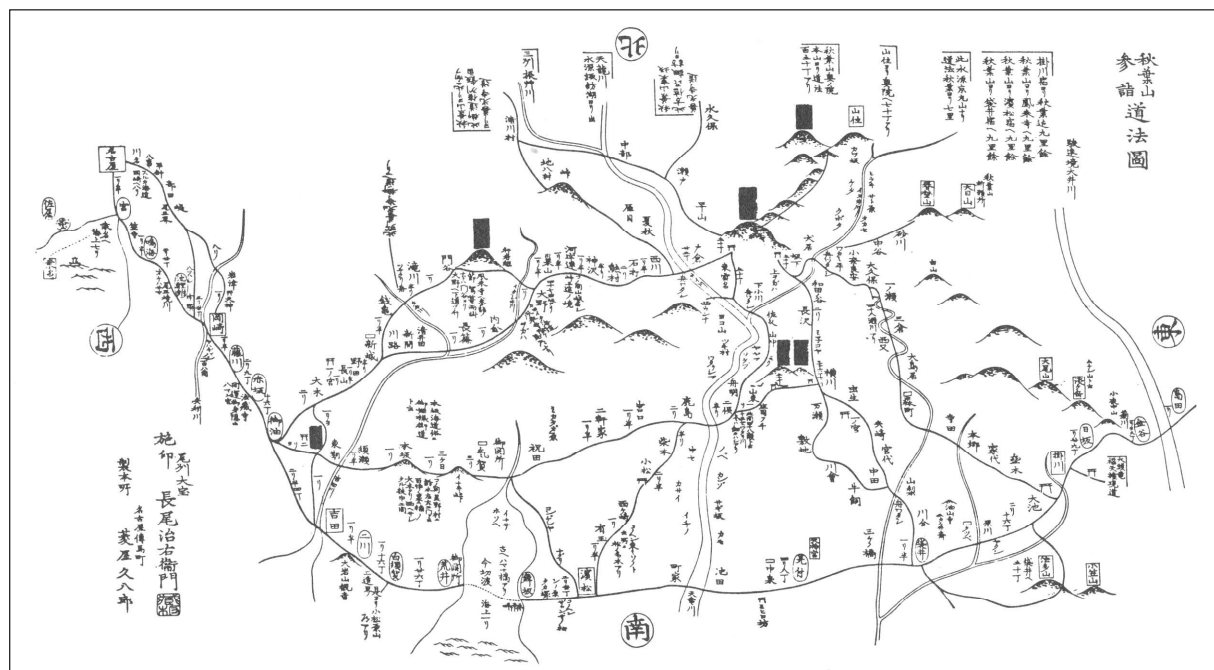


図2-2-10 秋葉山参詣道法図(杉山家文書)

②建造物

岡崎城下の秋葉山常夜燈について、江戸時代に記された『参河聡視録』には、「秋葉山常夜燈、寛政二年庚戌冬十二月より初めて町々に建立せり」とある。秋葉講による単立の秋葉山常夜燈は寛政2年(1790)の両町のもの筆頭に、建立が流行するのは、各地域の民衆に信仰が浸透した江戸時代後期の寛政期(1789～1801)で、この時期の常夜燈は、両町、板屋町、籠田町等の城下町や東海道沿いに多い。建立地は、街道沿いの町や村の中心地となる道の三叉路、辻、寺の門前等である。中には、方角、行き先を刻み、道標としての役割を果たしていたものがあることもその建立地の特徴を示している。こうした常夜燈は、近世に建立されたもののうち約半分が文化・文政期(1804～1830)に建立されている。寛政期によく見られた「講中安全」の銘文がなくなり、「村中安全」「町内安全」等の銘文が多くなることから、秋葉信仰が講仲間の信仰から町や村の信仰として浸透定着したことを物語っている。現在でも、秋葉山常夜燈の建つ町の多くでは、講がありお札を受ける代参が行われ、市街地では本山で受けてきたお札を祀る祠が付随する例も多い。

秋葉山常夜燈は、市内では現存で120基を数え、ほぼ全てが花崗岩製である。本市は良質な花崗岩が産出し、茨城県桜川市真壁、香川県高松市庵治町と並んで石の三大産地のひとつに数えられている。特に、墓石や灯籠、彫刻を始めとする石製品は、伝統に培われた品質と技術の高さで日本一ともいわれ、「石都岡崎」と称されている。江戸時代には、岡崎の石製品を諸大名が徳川家ゆかりの寺社に競って奉納したほか、秋葉信仰を背景とした町や村による常夜燈の建立も盛んに行われ、文化・文政期(1804～1830)に最盛期となった。常夜燈に石工銘が刻まれているものは少数であるが、作者が判明しているものには岡崎の石工が多い。それらは規模が大きく優美で、石材も硬質のため保存状態の良いものが多く、市街地の中において、現在も街道筋の歴史文化や近世の町と村の中心地を今に伝える重要な建造物の一つとなっている。



図2-2-11 秋葉山常夜燈(籠田町)



図2-2-12 秋葉山常夜燈(花崗町)

表2-2-2 東海道沿いの主な秋葉山常夜燈の所在地及び建立年代

所在地	建立年代	所在地	建立年代
本宿町	寛政年間(1789~1800)	梅園町	文政 11 年(1828)
本宿町	寛政 13 年(1801)	籠田町	寛政 10 年(1798)
舞木町	文化 10 年(1813)	亀井町	天保 15 年(1844)
市場町	寛政 7 年(1795)	六供町	嘉永 6 年(1853)
蓑川町	文政 10 年(1827)	六供町	延享 4 年(1747)
保母町	天保 12 年(1841)	六供町	寛延 3 年(1750)
岡町	万延 1 年(1860)	六供町	明治 12 年(1879)
丸山町	大正 13 年(1924)	本町	文化 3 年(1806)
大平町	弘化 4 年(1847)	康生通	昭和 53 年(1978)
大平町	文化 7 年(1810)	材木町	寛政 10 年(1798)
大平町	明治 16 年(1883)	東能見町	嘉永 4 年(1851)
大平町	昭和 9 年(1934)	東能見町	年代不詳
欠町	文政 13 年(1830)	福寿町	天保 11 年(1840)
栄町	昭和 8 年(1933)	魚町	天保 4 年(1833)
朝日町	大正 15 年(1926)	魚町	天保 4 年(1833)
両町	寛政 2 年(1790)	板屋町	寛政 9 年(1797)
中町	弘化 4 年(1847)	八帖町	寛政 10 年(1798)
中町	明治 11 年(1878)	八帖町	享和 3 年(1803)
中町	明治 13 年(1880)	八帖町	安政 4 年(1857)
伝馬通	享和 3 年(1803)	矢作町	年代不詳
島町	嘉永 2 年(1849)	暮戸町	明治 35 年(1902)
花崗町	文化 10 年(1813)	西本郷町	天保 2 年(1831)
花崗町	昭和 49 年(1974)	宇頭町	明治 28 年(1895)

ア.秋葉社と秋葉山常夜燈

本宿町にある秋葉社は、『参河國額田郡神社誌（昭和7年(1932)9月1日）』によると、大正2年(1913)に氏神である本宿神明社に合祀された。神祠は、桁行1尺5寸(約45.5センチメートル)、梁間1尺5寸(約45.5センチメートル)、折屋造、板葺。

大平東町には弘化4年(1847)、大平西町には昭和9年(1934)と刻銘された常夜燈がある。旧城下より東海道を東へ向かった欠町には、文政13年(1830)建立と刻銘された常夜燈が街道脇に建つ。東海道沿いの岡崎城下で石屋町として栄えた花崗町には、文化10年(1813)建立と刻銘された大型の常夜燈があり、石工の技を極めた龍の彫刻が施されている。同じく城下であった籠田町には、『参河聡視録』に寛政10年(1798)建立と記された常夜燈が建つ。



図2-2-13 秋葉山常夜燈(大平辻中)

イ.秋葉堂

岡町の総持院は、「岡の三尺坊」「男川三尺坊」と呼ばれる享保3年(1718)開創の曹洞宗寺院である。「岡崎市史第7巻(昭和47年(1972)10月)」によると、境内には慶応元年(1868)再建、大正6～7年(1917～1918)に改修された本堂、文久年間(1861～1864)に建立された秋葉堂が並び建つ。本堂及び秋葉堂は、木造平屋建て、入母屋造、棧瓦葺である。また、境内には、慶応3年(1867)の手水鉢や、明治42年(1909)建立の門柱がある。

六供町の甲山寺(本堂(護摩堂)は市指定有形文化財)は、天台宗寺院であり、創建は、天文13年(1544)に松平広忠が和田村法性寺の六坊を移転、護摩堂を建てたことによる。慶長8年(1603)に徳川家康公が本堂を再建、さらに元禄15年(1702)に5代将軍綱吉が再建している。甲山寺山内の一坊であった極楽坊の境内には、延享元年(1744)建立と伝えられる秋葉堂がある。桁行3間(約5.4メートル)、梁間3間半(約6.3メートル)、宝形造、棧瓦葺で、前面に1間の向拝がつき、四方に縁をめぐる様式からも、17世紀半ば頃のものと考えられている。



図2-2-14 総持院秋葉堂と常夜燈



図2-2-15 甲山寺秋葉堂と秋葉大権現燈籠

③活動

東海道を中心に広がっている秋葉信仰の祭礼は、秋葉祭と呼ばれることが多い。各町内会・講等で年に1度、年行事等の代表者が代参して受けてきたお札を秋葉山常夜燈や秋葉社へ納め、町の人々が集まり僧侶・神職の祈祷を受けるものと、寺院の秋葉堂において秋葉山大祭として三尺坊命日にあたる11月16日又はその前後の日に祈祷や火渡りを行うものがある。

ア.秋葉祭

秋葉社での秋葉祭として、『町の記録 特集(昭和56年(1981))』によれば、東部の本宿町では、秋葉山本宮秋葉神社(静岡県浜松市)の火祭りで祈祷を受けた「火災鎮護」のお札を配ると記載されている。現在も、毎年11月中旬に氏子町の世話役が約620枚のお札を代参で受け、秋葉社で大晦日に除夜祭りとともに秋葉祭を行っている。また、昭和30年(1955)頃までは燈明番があり、各常夜燈に火が灯されていた。

東海道沿いの秋葉山常夜燈での秋葉祭としては、常夜燈建立後、祭礼が連綿と行われ続けている町内会・講等がある。現在の祭りの形態としては、毎年、あらかじめ各組織の世話役等が秋葉山に代参し、お札を受けて、秋葉山常夜燈で祭礼を行っている。

大平東町では、常夜燈に消防団の詰所と火の見櫓が隣接している。5月4日の祭礼日に秋葉講の旗と紅白幕、祭壇を飾り、常夜燈に注連縄しめなわでお札を取り付け、1年の安全を祈願している。大平西町では、12月第2日曜日に、常夜燈の前に幟や祭壇をしつらえ、野菜や果物等を供える。幟は、昭和29年(1954)10月、氏子中によってつくられたものが現在も使われている。お札は年行司が代参し、当日お参りにきた町内の人々に配られる。欠町では、11月中旬に常夜燈に幟を立て、近隣の町公民館で祭壇を設け住職の祈祷を受ける。花崗町みかげでは、11月中旬の日曜日に、常夜燈に隣接する公民館で、町内の人々が供物を供え、祭礼を行っている。籠田町では、11月16日前の日曜日にお札と各自持ち寄ったお神酒、菓子、果物等の供物を常夜燈の前にしつらえた祭壇に供え、町内の人々が菅生神社宮司のお祓いにより祭礼を行っている。お札は供物と共に各戸へ配られる。代参や祭礼の準備は、当番となる年行事等が取り仕切っている。

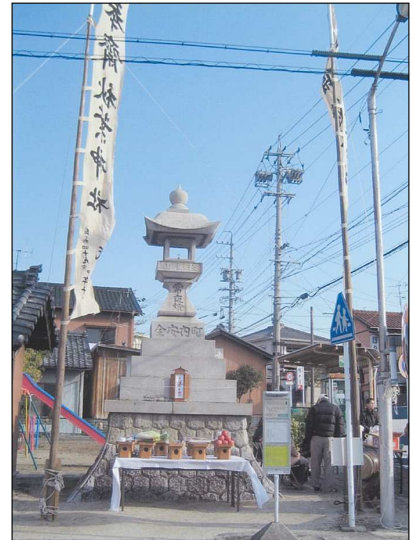


図2-2-16 大平西町の秋葉祭
(平成24年(2012)12月9日)

イ.秋葉堂での秋葉山大祭

総持院所蔵の『三尺坊略縁記』によると、秋葉堂での秋葉山大祭は、文久年間より寺院鎮守の秋葉大権現の大祭として始められた。同じく文久年間より始められた火渡りは、厄落としと無病息災を願う神事である。『美合村々誌(大正9年(1920))』では、火渡り神事に豊橋遠州の地より参詣するものも多いと記載されている。昭和50年代から休止され、平成22年(2010)に約30年ぶりに再開されたが、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、令和2年(2020)以降、再び休止している。2度目の休止前は、12月第2又は第3日曜日(17日に近い日曜日)に行われていた。大祭当日は、午後1時より夕刻まで、堂内の丈3尺の三尺坊本尊に般若心経等の祈祷があげられ、読経と鈴の音が参道に響き渡る。宵



図2-2-17 秋葉山大祭 火おこし



図2-2-18 秋葉山大祭 火渡り

闇につつまれ、空気の冴えわたる午後6時頃、堂前に現れた^{ぎょうじや}行者たちが2基の常夜燈(万延年間(1860~1861)建立)との間に白砂が敷かれ、注連縄で結界された周囲を回り祈祷し、神火を起こす。大きな火が境内と参拝者を照らし、火の粉が天へと舞う。その火を鎮め、先達の行者が炎の間を渡ると町内外の老若男女の参拝者も次々と素足で火渡りをする。

甲山寺秋葉堂では、毎年11月16日に大祭として大護摩^{たごま}が焚かれ、信徒を始め多くの参拝者が祈祷を受けたお札を持ち帰る。堂内には、昭和26年(1951)の祈祷札が残されている。



図2-2-19 秋葉山大祭 大護摩焚き
(令和4年(2022)11月16日)

④まとめ

東海道沿いを中心に広がっている秋葉信仰の風習や祭礼は、現在も秋葉山常夜燈や寺社を舞台に、各町内会・講等に連綿と受け継がれており、江戸時代以来の防火と地域の安全を祈る伝統行事が毎年行われている。「講内安全」「町内安全」と記された常夜燈には、東海道よりもたらされ、地域に根付いていった信仰と、1年間の地域の防火と息災を祈る人々の想いが込められており、祭壇を設け幕が引かれた常夜燈での祭礼に、本市の東海道の歴史文化の一端が感じられる。

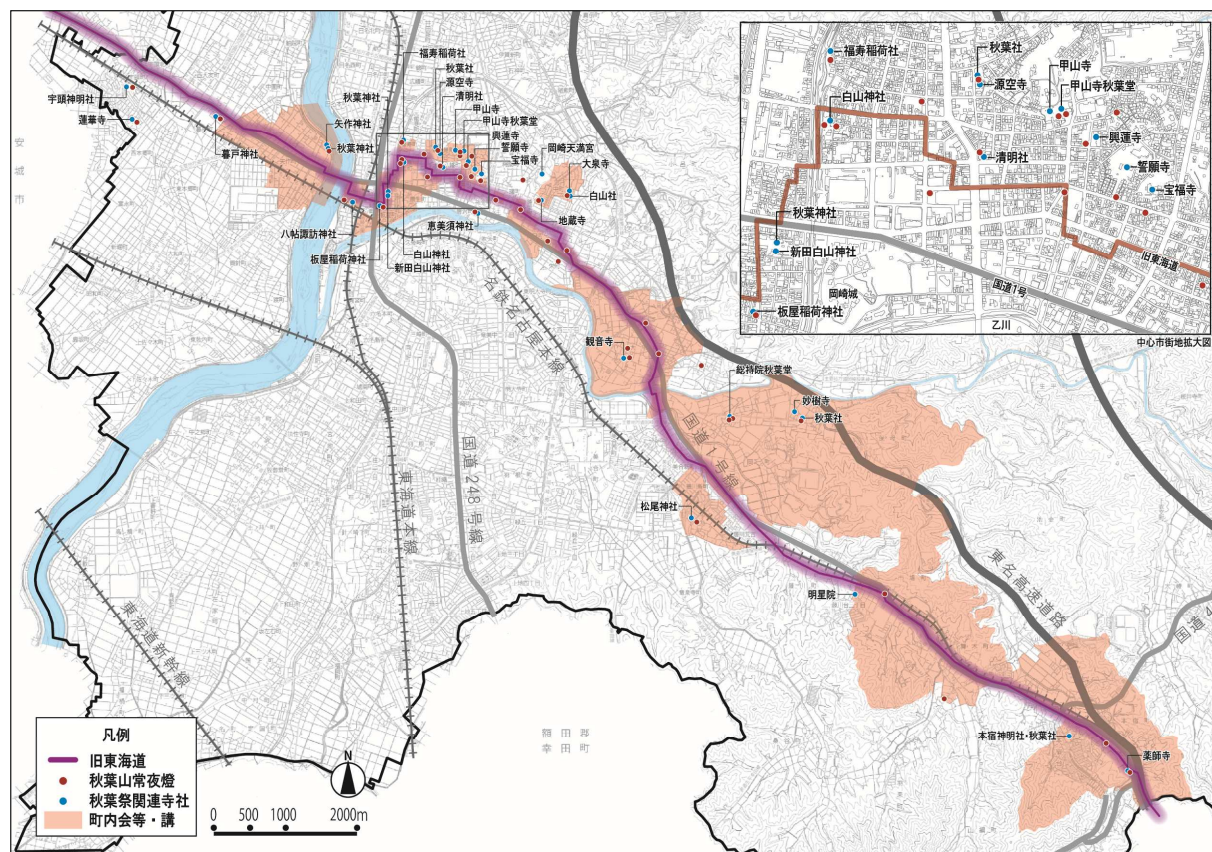


図2-2-20 東海道周辺の秋葉山常夜燈と秋葉祭の分布



今も続く秋葉山常夜燈の燈明番

曲亭馬琴きょくていばきんが著した『鞆旅漫録』きりよまんろく※(享和2年(1802))の中で、至る所にあると記した秋葉山常夜燈であるが、空襲や災害、市街地の整備等により損壊に至ったものや、元の位置から移動されたものも多く見られる。また、火を灯すことのない常夜燈や、ロウソクの代わりに電球(現在はLED電球がほとんどである)が設置された常夜燈も目立つ。しかし、現在も常夜燈にロウソクの火を灯す地区も存在している。

a. 鳥川町上とりかわの事例

ニンヤとイヌバサに2基の常夜燈があり、それぞれのイエが「お灯明番」と称して交替で火を灯し、お参りをしている。

b. 大代町の事例

常夜燈の燈明番は、「番長」と書かれた板の入った箱が回ってくると、夕方にロウソクをあげに行く。ロウソクに火を灯して帰ってくると、箱をトナリのイエに回す。

c. 桜形町麻生の事例

この地では12軒で毎晩順番に燈明番として、火を灯し続けている。

d. 福岡町萱園かやぞのの事例

萱園の秋葉常夜燈は、井杭・向郷の区で別々に祀られていたが、明治24年(1891)11月17日、中西野の地に統合し、現在の常夜燈が建立された。町内では、雨の日、風の日を問わず、毎日交代で常夜燈に燈明を灯し続け、お参りを続けている。

e. 中島町の事例

中島町では、燈明番が毎日交代し、燈明箱が引き継がれていく。
この他に、保久町ほっきゅう・千万町ぜまんちょう町においても燈明番が続けられている。



図2-2-21 中島町の燈明番
(令和7年(2025)9月29日)



図2-2-22 千万町町の燈明番
(平成29年(2017)5月31日)

※享和2年(1802)に初めて関西地方を旅した際の紀行文。旅の道中や京阪地方での見聞を、風俗や奇談、古跡などを交えて克明に記録した作品で、後世に文化や風俗を知る上で重要な資料。

(4) 東海道を舞台にした祭礼等に見る歴史的風致

①はじめに

古代より人々の往来の多かった東海道では、古くから道沿いに集落ができ、寺社が建ち、祭礼が行われてきた。そして人々の往来が積み重ねられ、様々な文化が伝えられ地元の祭礼に融合し継承されている。

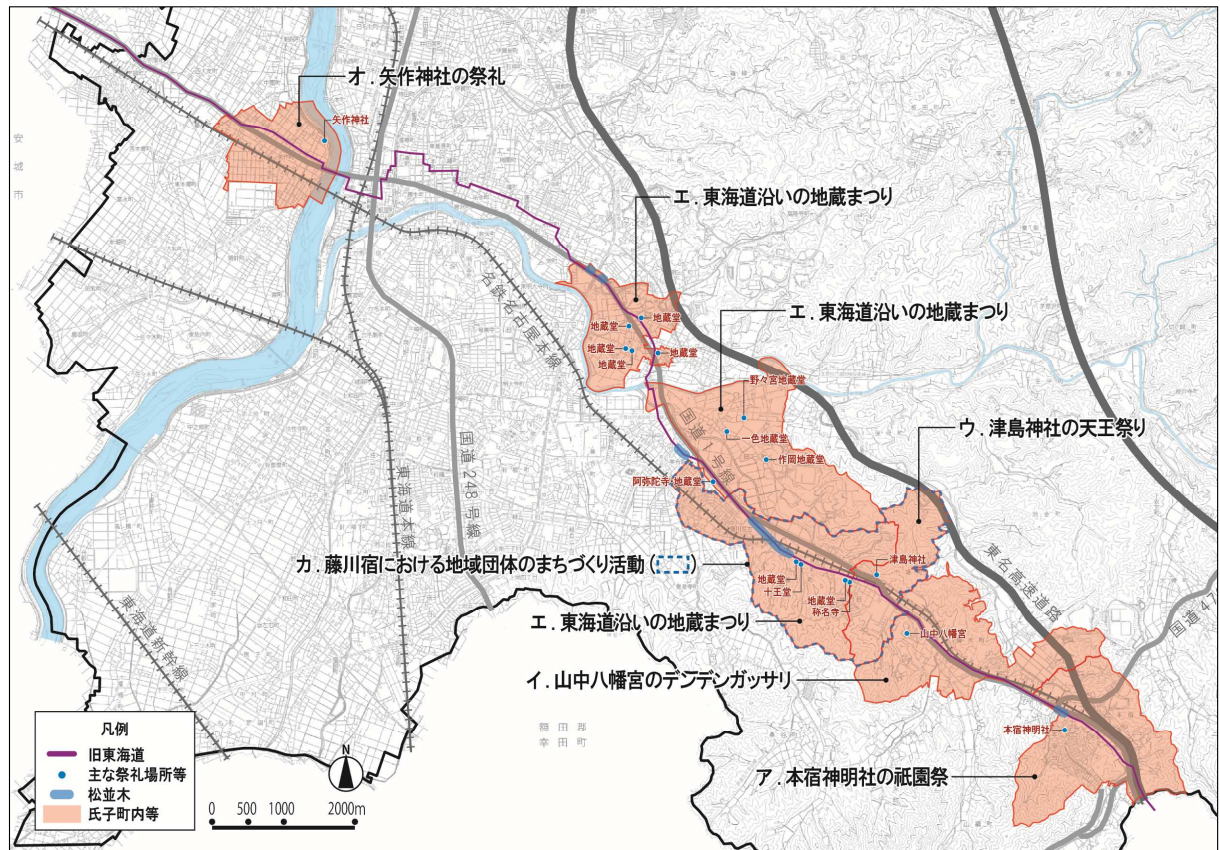


図2-2-23 東海道沿いの主な祭礼等

②建造物と活動

ア.本宿神明社の祇園祭

本宿は、本市の東海道東の出入口にあたり、旧東海道、国道1号、東名高速道路、名古屋鉄道が東となり、古今とも東西交通の要衝となっている。元宿と表記されたこともあり、古代の山綱郷は、この地域も含み山綱駅家があったということからこのような地名になったのではないかとされている。本宿陣屋跡があり、江戸時代にはこの付近12か村の代官の置かれた所であ



図2-2-24 本宿神社

る。山の神を祀るテイチン(帝鎮)講⁵等の古くからの民俗行事も多く残されている。

中世以降、室町幕府6代將軍足利義教^{あしかがよしのり}の祈願所とされる法蔵寺を中心にまちなみが形成された。法蔵寺は東海道に接する場所に位置しているため、江戸時代には多くの参詣者が訪れた。家康公学問所の寺伝もあり、82石余の朱印寺院となり幕府からの庇護厚く、参勤交代の大名も駕籠^{かご}から降りて参詣したとされる。

a.本宿神明社

『参河國額田郡神社誌(昭和7年(1932)9月1日)』によると、本宿神明社は、至徳2年(1385)將軍足利義満のとき、龍芸和尚が二村山法蔵寺と号し、堂中に祭祀していた皇大神を今の地に遷し、村民の産土神として社殿を建立し崇敬したとある。同文献によると、社殿は、大正2年(1913)に建立されたとある。その後、神社の資料(平成27年(2015)4月1日)によると、昭和30年(1955)に拝殿が建て替えられ、昭和45年(1970)、平成9年(1997)に本殿の屋根が葺き替えられた。現在の本殿は、部材も相応に古いものであることから、大正初期のものであると推測される。本殿は、桁行1間(約1.8メートル)、梁間1間(約1.8メートル)、神明造、銅板葺で、拝殿は、桁行3間(約5.4メートル)、梁間2間(約3.6メートル)、切妻造、銅板葺、神明造である。祭神は天照皇大神で、秋葉社、稲荷社を合祀し、津島社、琴平社を境内社として祀っている。

b.祇園祭の歴史

本宿神明社では、境内社である津島社の祇園祭(天王祭)が7月最終日曜日に行われる。祭りの起源は今から250年程前の江戸時代に、本宿村や近村で伝染病が流行したが、牛頭天王を祀っていた立場^{たてば}(東町)では病人がなく、牛頭天王のおかげだとうわさが広まり、本宿村中心の西木竹^{きたけ}に社を建て、祀るようになったとされる。古くは「ちょうちん祭り」と呼ばれ、神輿とち



図2-2-25 本宿神明社祇園祭の山車巡行

ょうちん行列のみであったものが、大正の中頃から昭和初期になると、飾り付けをした荷車に子供が乗って、笛や太鼓を鳴らすようになり、花火ややぐらを担いで東海道を練り歩くようになった。神輿の内部には、明和4年(1767)に造られたことが記されており、嘉永3年(1850)には修繕が行われた。山車は4氏子町に各1台ある。当初の山車は立場の東町だけであったが、昭和6年5月に栄町の山車が造られた。山車の床下には「栄町山車製作年月日 昭和六年五月吉日 作者 松本源治」と記されている。戦後になって、西町が昭和25年(1950)に、

⁵ 鉢地町で、収穫後の旧暦11月第2申の日に行われる山の神祭り。3歳以上の男が参加し、注連縄等を作り、荒神の森の神木へ参る。

中町が昭和27年(1952)にと、順次、氏子町ごとに造られた。東町の山車は伊勢湾台風時に壊滅し、現在の山車は、昭和63年(1987)に再建されたものである。

c.現在の祇園祭

祭礼当日は、午後3時より津島社前で氏子による^{はつよしき}発輿^{しき}の後、出立し、旧東海道や新町各町8つの御旅所・お立宮^{たちぐう}を移動する。午後5時過ぎの宵祭^{とぎよ}渡御では、先頭町の山車に続き、神輿^{たかほり}渡御の行列が高張(提灯)、十二張⁶2本、梵天(花笠)2本、白丁^{はくちよう}(神輿と榊持ち)で並び、他の山車の列が繰り出す。西町の御旅所、中町のお立宮のそれぞれの地点で神事と舞踊りを奉納する。東町の法蔵寺前に到着すると神輿は法蔵寺境内へ入り、踊りを奉納する。出発地点は西町又は東町で毎年入れ替わる。十二張、梵天の竿先にはススキの葉を飾る。お立宮は、秋葉山常夜燈の前に祭壇をしつらえ、6月30日の大祓(迎神祭)から9月中頃(送神祭)までの夏の暑い時期に分社として立てられる。ここは、火の見櫓、本宿村道路元標が集中し、旧本宿村役場が建てられた本宿の中心地である。午後8時過ぎに山車は各町へ、神輿は津島社へ帰還渡御する。その後、本宿神明社、法蔵寺、本宿陣屋代官屋敷前が煙火場となり、宵闇を染める手筒花火が奉納され、祭りは華やかに終了する。

本宿神明社の祇園祭は、地域の氏子らが連携し、古くからの祭礼に、高張提灯等を掲げて練り歩く^{かんとろ}竿燈行列、山車渡御を加え発展させながら伝えられており、祭礼を通じて地域の団結力が感じられる。



図2-2-26 祇園祭のお立宮前の神事



図2-2-27 手筒花火(本宿神明社境内)

⁶ 12個の提灯を取り付けた竿燈。提灯の数は旧暦に換算して、その月の数と同じ12又は13(閏月)個が取り付けられる。

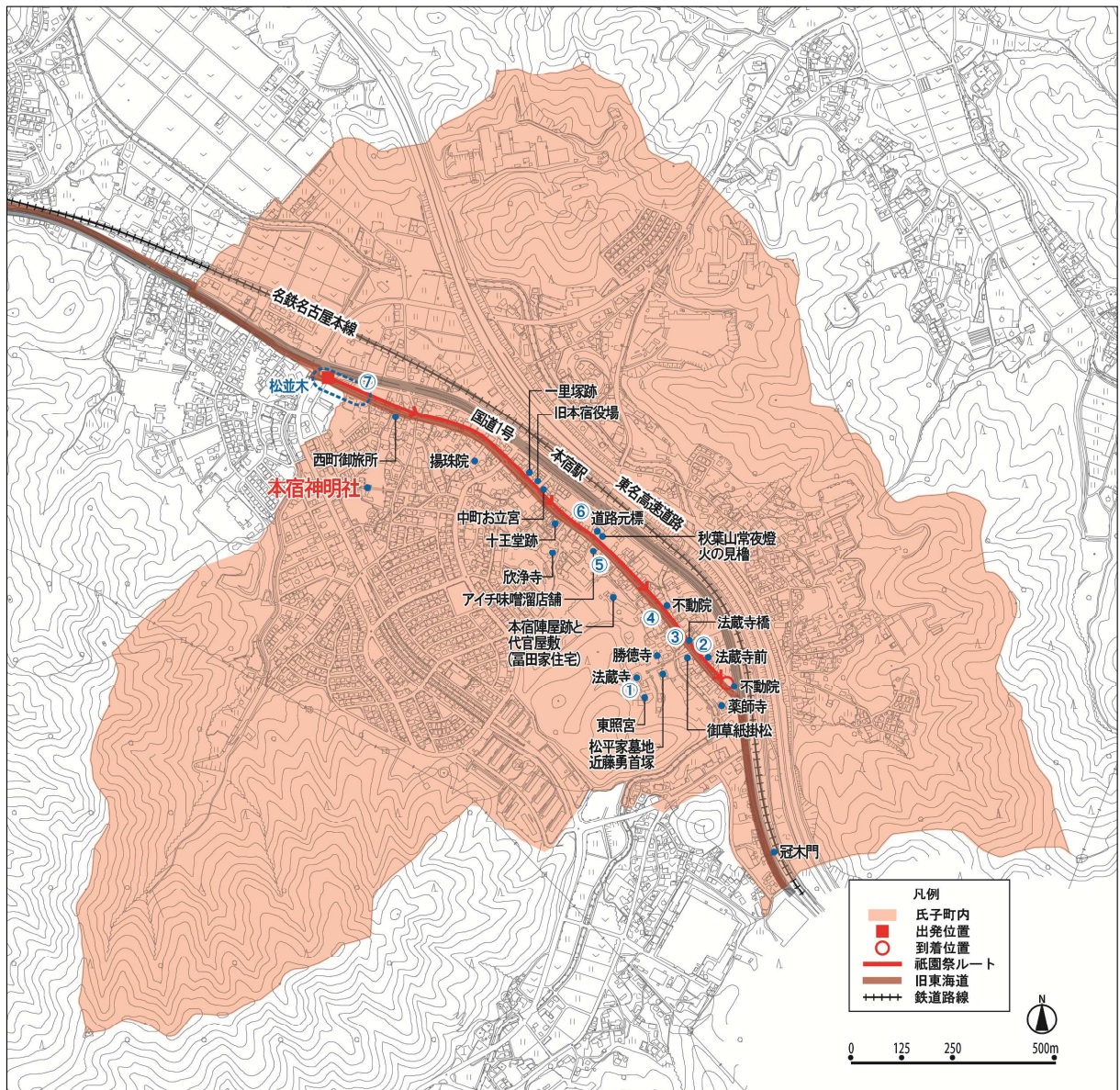


図2-2-28 本宿神明社の祇園祭の山車巡行図と市街地の状況(令和7年(2025))



図2-2-29 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

イ.山中八幡宮のデンデンガッサリ

a.山中八幡宮

岡崎市の東部、国道1号沿いの舞木町地内の丘陵地にある山中八幡宮は、寛永4年(1627)の『山中八幡宮記』によれば、文武天皇3年(699)秋、当地に創建された稲前神社^{いなさき}で初めて「供物の礼」が行われたことに始まるとある。さらに永禄6年(1563)、三河一向一揆に追われた家康公が、社地の鳩ヶ窟^{はとがくつ}といわれる洞窟に身を隠し、一命を救われたといい、慶長8年(1603)家康公朱印状で150石を寄進された。このことは、『参河国額田郡神社誌(昭和7年(1932)9月1日)』にも記されている。祭神は応神天皇、比咩大神、息長足姫命。本殿は、桁行2間(約3.6メートル)、梁間1間3尺(約2.7メートル)、三間社流造、檜皮葺。多数の棟札が所蔵されており、現在の本殿が再建されたのは延宝7年(1679)で、安永5年(1776)に修復、文化12年(1815)に屋根替えを行っている。寛政13年(1801)に再建された拝殿は、桁行5間(約9メートル)、梁間3間(約5.4メートル)、入母屋造、棧瓦葺、平入り。参道には常夜燈と正面参道入口の鳥居の横にはクスノキの巨樹がそそり立ち、背景の社叢林とともに、神社境内としての壮厳な雰囲気醸し出している。



図2-2-30 山中八幡宮の社叢



図2-2-31 山中八幡宮境内

b.デンデンガッサリの由来

デンデンガッサリ(市指定無形民俗文化財)は、毎年正月3日、正式には山中八幡宮の御田植祭として行われる。田遊びの歌詞の始めに「デンデンガッサリヤー」という詞^{ことば}があるので、「デンデンガッサリ」と呼ばれるようになった。その年の稲作の豊作を予祝するために、田作りの過程を模倣的に演技する「田遊び」である。東海地方に多く分布し、特に田遊びが単純で伝承されている例が三河地方に多く、三河国三之宮である猿投神社の貞和5年(1349)『年中祭礼記』に「田遊」が登場する。デンデンガッサリの起源は室町時代といわれている。現在は、正月3日の午後2時から拝殿で行われるが、昭和初期までは旧暦正月3日の夜に行われてい



図2-2-32 デンデンガッサリ 稲刈り

きなげ
『年中祭礼記』に「田遊」が登場する。デンデンガッサリの起源は室町時代といわれている。現在は、正月3日の午後2時から拝殿で行われるが、昭和初期までは旧暦正月3日の夜に行われてい

た。

例祭の準備は、昭和47年(1972)に設立されたデンデンガッサリ保存会により、12月30日に社務所で行われ、祭りに使われる60キログラムの大鏡餅やお供えの餅が作られる。もち米は八幡宮周囲に広がる田で実ったものを使用する。

c.現在のデンデンガッサリ

デンデンガッサリの構成は大別すると「前歌」「後歌」「せりふ」「所作」の4部に分けられる。奉仕者が全員そろると、まず神職が祝詞を奉納する。終わると太鼓の周囲に立ち、太鼓を乱打すると、「ヤヤヤヤヤヤー」と言いながら足踏みで「田ごね」の所作をする。次いで、「デーデンデンガッサリヤー」と前歌に入る。歌の間中、太鼓は規則正しく叩かれる。歌が終わると「弁



図2-2-33 デンデンガッサリ 牛

当」となり、櫃ひつから祭りに奉仕する人と参拝者全員にしゃもじで1口ずつ御飯が配られる。人々はそれを手のひらで受け取り、口に入れる。「弁当」が終わり、再び前歌・後歌が歌われる。歌が終わるとせりふとなり、神前に飾られていた大鏡餅を田に見立てた太鼓の上へのせ、天気の良いことと稲の出来栄えをほめ、氏子中の地名を呼び上げる。全員で「ザーラザラ」と声を揃えて鎌に見立てたお供え餅を手に稲刈りの所作をする。この後に登場する牛の準備ができたかどうかを尋ねた後で、縄であんだ角を頭につけた牛役が四つん這いになって、収穫した稲穂(大鏡餅)を背に載せて太鼓の周りを回る。重さに耐えかねた牛が倒れると、人々は「丈夫な牛でも倒れるほどの豊作だ」と言って、喜び合う。牛が神前から姿を消した後、鏡餅は手頃な大きさに切られ、見物人に対して餅投げが行われる。この餅を食べると1年間かぜをひかないという言い伝えがある。

街道に沿った集落と田園風景の中に、古来より守られてきた社叢林を背景に常夜燈と朱色の鳥居が建つ中、氏子らによるデンデンガッサリの大太鼓の音が響き渡り、人々が五穀豊穡を願う古式ゆかしい祭礼の風情が感じられる。

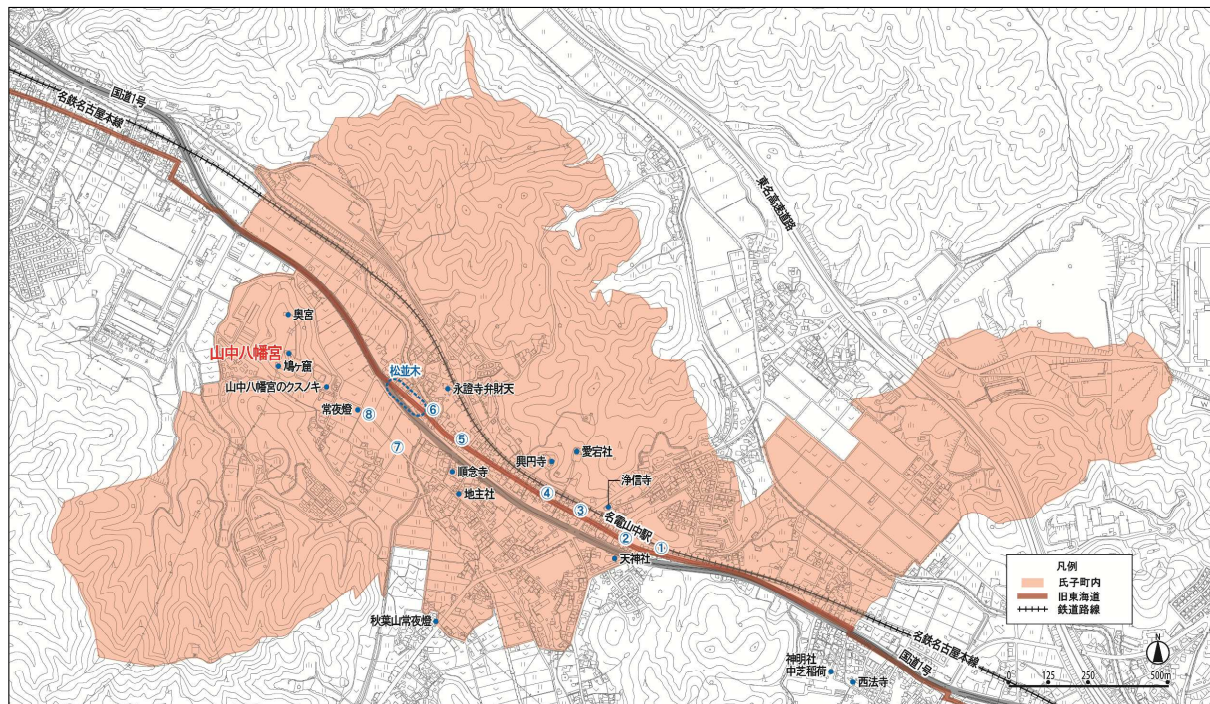


図2-2-34 山中八幡宮デンデンガッサリと市街地の状況



図2-2-35 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

ウ.津島神社の天王祭り

a.津島神社

かつて藤川宿であった市場町には、現在も街道沿いに寺社や伝統様式の歴史的な建造物が数多く建ち並ぶ。中でも、市場町の津島神社は、藤川宿の加宿市場村の氏神であり、「牛頭天王宮」と呼ばれていた。『参河国額田郡神社誌(昭和7年(1932)9月1日)』には、元文3年(1738)創建、延享5年(1748)社殿を修理、嘉永7年(1854)拝殿を改築、明治25～26年(1892～1893)



図2-2-36 津島神社祭礼のお立宮

に本殿雨覆を改築とあり、現在の社殿の部材も相応に古いことから、延享初期のものと考えられる。また、境内の灯籠には、寛政5年(1793)9月の刻銘がある。現在の本殿は、桁行3間(約5.4メートル)、梁間2間(約3.6メートル)、流造、瓦葺で、拝殿は、桁行3間(約5.4メートル)、梁間2間3尺(約4.5メートル)、入母屋造、瓦葺である。祭神は牛頭天王。本殿は牛乗山^{うしのり}を背に今もかわらず町を見守っており、藤川宿の歴史を今に伝える重要な建造物である。

b.天王祭りの歴史

天王祭りは、氏子らにより毎年7月第2土曜日に行われ、夏病み防止と虫送りの意味が含まれている。社伝によれば、天王祭りに使用する渡御の神輿は、慶安年間(1648～1651)に現在地に加宿移転した際に、隣町の山中八幡宮より移されたものと伝えられ、山中八幡宮の祭礼でもこの神輿が使われることから、少なくともこの頃には始められたと考えられている。現在の神輿には、文化5年(1808)5月吉日と記名がある。また、『参河国額田郡神社誌(昭和7年(1932)9月1日)』にも、神輿渡御の記述がある。

c.現在の天王祭り

津島神社(津島市)のお札を年行司が受けに行き、市場町の明星院に7日間宿をし、お立宮^{たちみや}に75日間納めた後、本殿へ納める日が宵祭り日である。旧東海道からの参道入口の常夜燈脇に幟を立て、お立宮(通称「おたちぐうさん」と呼ばれる祠を祀り、雄竹注連で囲む。その祭礼当夜に行われる神事として、竿燈行列(通称「おとぎょ」)がある。神輿渡御の行列の前後に高張、十二張の竿燈が加わり、ほの暗くなる午後7時頃より提灯に明かりを灯し、氏子町の人々が藤川宿であった東海道中を厳かに巡行する。竿燈は、戦前には提灯を20余りつけ、竿数も多かったとされているが、戦後には、提灯12



図2-2-37 津島神社の竿燈行列の巡行

個、高張6本、十二張12本となり、現在は、更に竿数を減らして実施している。行列は市場町東外れの国道1号の御旅所まで進み、そこで祝詞があげられる。

竿燈に灯火が入れたさまは、赤い提灯が夕暮れ深まった街道沿いのまちなみの夜景に映え、天王祭りならではの、夏の祭りにふさわしい素朴な美しさを感じさせる。

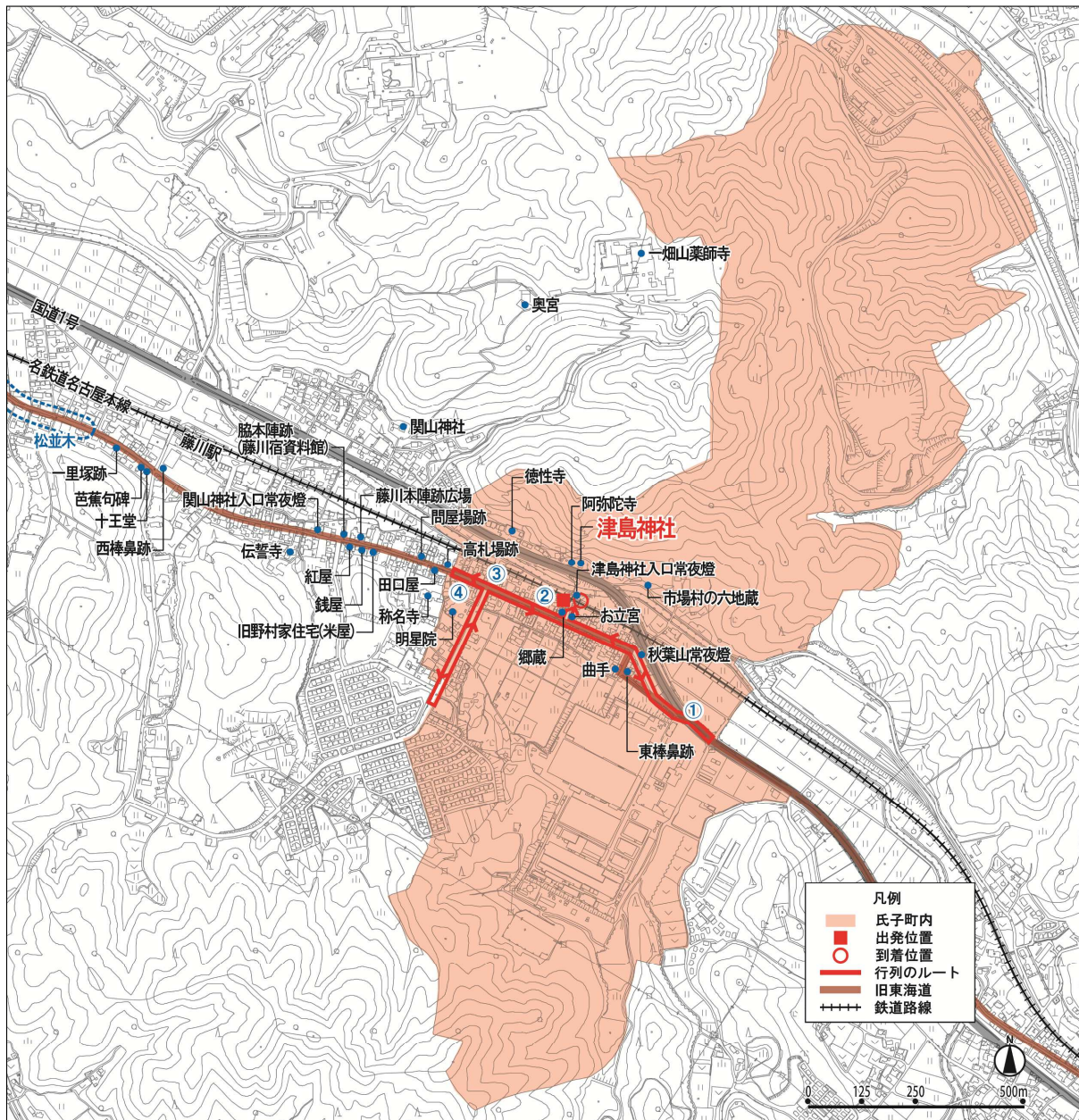


図2-2-38 津島神社の天王祭りの神輿渡御・竿燈行列の巡行図と市街地の状況



図2-2-39 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

エ. 東海道沿いの地蔵祭り

地蔵祭りは、「地蔵盆」^{じぞうえん}「地蔵会」^{じぞうえ}とも呼ばれ、地蔵菩薩の縁日である旧暦7月24日辺りに信徒らが地蔵に供物・灯明を供え、仏名を唱えたりする行事である。現在は、それぞれの地域で日を選んで行っている。地蔵菩薩は、平安時代末期から六道で苦しむ衆生の救済仏として京都を中心に信仰され始め、中世には子供を守る仏として信仰を集めた。地蔵祭りの信仰は、江戸時代前期に複数の記録がある京都及び近畿地方で盛んであったものが、東海道を通じて広がったとみられる。道祖神信仰と結びついた路傍や街角のお地蔵さん、いわゆる「辻地蔵」が対象で、子供の幸福を祈る民間信仰である。ここでは、藤川町(称名寺、十王堂)と、大平町(大平地蔵堂)を取り上げる。

a. 藤川宿の称名寺・十王堂の地蔵祭り

(i) 称名寺

称名寺は、藤川宿の中心部の市場町との境の藤川町にある浄土宗西山深草派の寺である。永禄11年(1568)に藤川村内「王子ヶ入」の赤山大明神(現在の^{せきさん}関山神社)西南の「川向」に法蔵寺^{きょうおうどうえ}教翁洞慧の隠居寺として開創された。慶安3年(1650)の「称名寺領除地証文」が残されている。

寺伝によれば、寛文2年(1662)に、三河代官鳥山牛之助の指示で、東海道が宿内で南方に変更される際に、街道沿いより奥まった現在地に移転した。境内に、「寛永5年」と刻銘された石塔があるほか、『東海道宿村大概帳(天保14年(1843))』には、藤川宿には旅籠が少ないため、興円寺・阿弥陀寺・徳性寺^{とくしょう}とともに旅籠^{はたご}の代行をしたことが記されている。

街道から入る参道を抜けると境内が開け、正面には宝暦9年(1759)建立の本堂が建つ。本堂は、木造平屋建て、寄棟造、棧瓦葺である。また、境内左手にある鐘楼の脇には、慶応2年(1866)に、地域の女人講によって造立された延命子安地蔵像を祀る堂がある。

(ii) 十王堂

十王堂は、藤川町の一里塚跡近くの成就院の境内にあり、東海道に面して建てられている。堂内の中央には緋の衣をまとった地蔵菩薩立像が安置され、その両脇に十人の王の像が並ぶ。像の台座に「宝永七庚寅年七月」^{ほうえい}の記年があることから、創建はこの年と推測されており、



図2-2-40 称名寺



図2-2-41 称名寺の地藏堂と鐘楼

昭和 12 年(1937)の成就院本堂の入仏式の写真には、十王堂が写っている。昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風により、堂の屋根が破損して切妻に改修されていたが、平成 29 年(2017)には、古写真を参考に、梁材等を最大限に活かしながら、現在の堂に改修された。木造平屋建、寄棟造、棧瓦葺。



図2-2-42 藤川宿の十王堂(令和7年(2025))

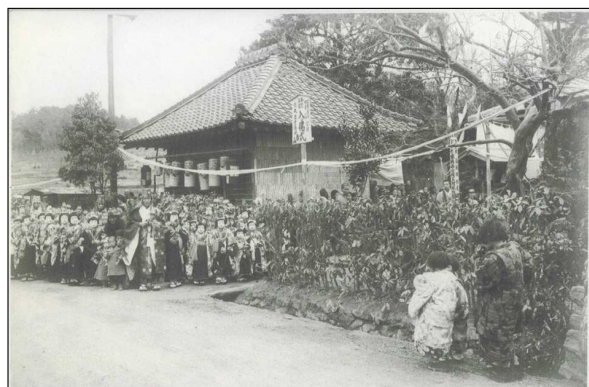


図2-2-43 成就院本堂入仏式の十王堂(昭和 12 年(1937))

(iii)現在の称名寺・十王堂の地藏祭り

称名寺の延命子安地藏祭りは、寺伝によれば慶応 2 年(1866)の地藏像が祀られた頃には始められ、毎年、月遅れの 8 月 24 日に行われる。昭和 60 年(1985)に地藏祭りを実施する地藏会が地域の人と共に発足し、活動が行われている。現在の地藏祭りは、当日、午前 8 時より近隣の檀家・信徒と藤川小学校区を中心とした藤川宿周辺の小中学生の子供たちが集まり、お堂の清掃や準備が行われる。日中は、白色の七如来の旗 7 本がつるされた本堂内で元禄 8 年(1695)に祀られた地藏尊像への祈願会が行われる。境内では、餅投げや縁日の出店も出されて賑わう。夕方になると地藏堂の前で住職の読経により揃ってお参りをする。その後、境内にごぞを敷いて皆で夕食をとり、子供たちは花火を行う。翌日の片づけに参加する子供は、寺におこもりをする。3 世代にわたる参加があり、地藏祭りが地域と世代をつなぐ行事となっている。

十王堂本尊の阿弥陀如来尊前では、字一里山^{いちりやま}の十数軒の講仲間により、毎年 8 月 24 日に近い土曜日に、地藏祭り(地藏盆^{せがき}施餓鬼会)が行われている。年番が本尊に紙の物相旗^{もつそうはた}(施餓鬼の旗)の串数本を刺し、生米を載せたナス等で施餓鬼棚を設け、境内の地藏堂に果物等を飾る。称名



図2-2-44 延命子安地藏祭り(昭和 60 年(1985))



図2-2-45 地藏祭り(令和7年(2025)8月 30 日)

寺の住職を呼び、十王堂内で地蔵盆施餓鬼会が勤められ、その後外に出て地蔵堂前でお参りが行われる。地蔵像はやや大型の坐像で、台座に文化10年(1813)の銘が刻まれているため、少なくともこの頃より地蔵祭りが続いていると考えられている。また、町には、昭和41年(1966)の地蔵祭りに関する記録資料が残されている。

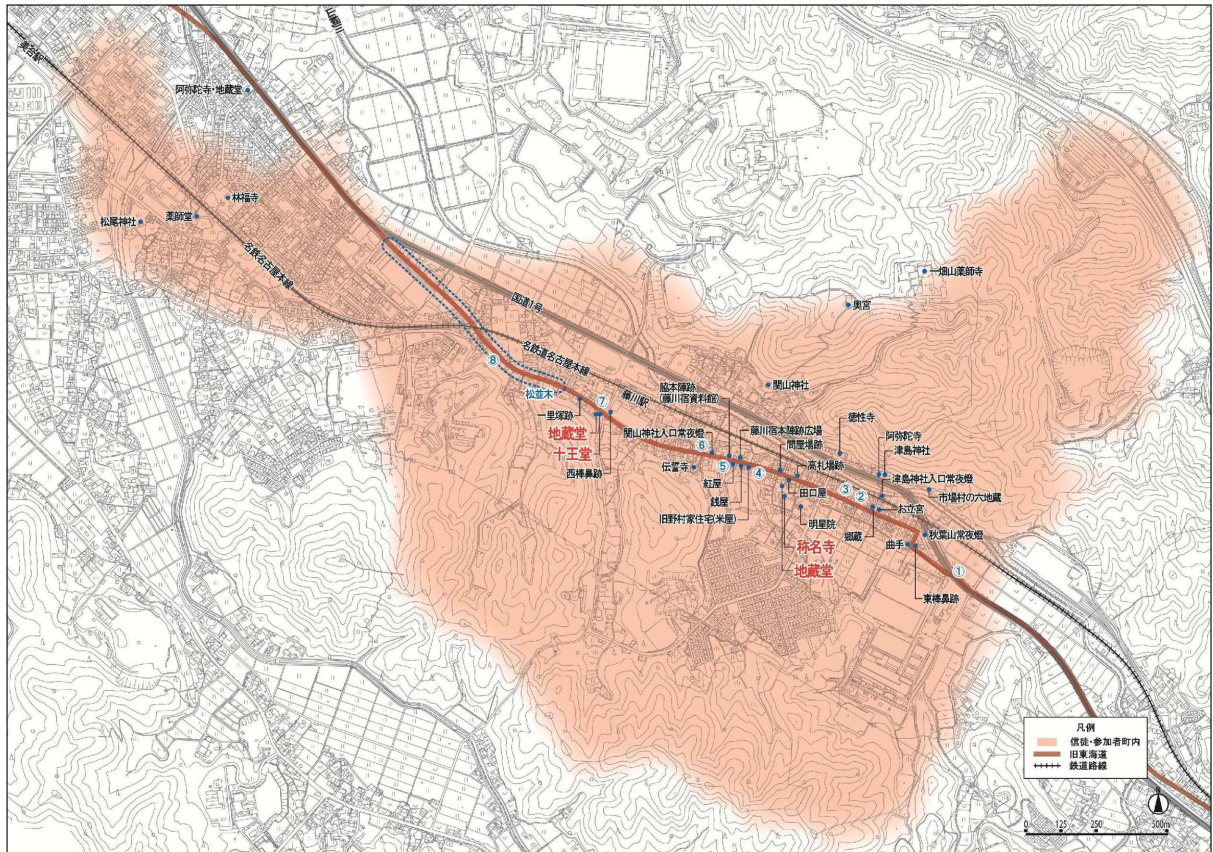


図2-2-46 藤川宿の称名寺・十王堂の地蔵祭りとし街地の状況



図2-2-47 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

b.大平地蔵堂の地蔵祭り

大平町は、江戸時代、大岡裁きで著名な大岡越前守忠相が大名となり治めた西大平藩に当たり、陣屋跡がある。東海道沿いには市内で唯一現存する一里塚が往時の姿を伝えている。市内の一里塚は、東より本宿(本宿町字一里山)、藤川(藤川町字一里山)、大平(大平町字岡田)、矢作(矢作町矢作橋西詰)にあった。慶長9年(1604)に江戸日本橋を起点に1里(3.92キロメートル)ごとの道標として設置され、旅行者の道程の目印になるとともに、夏には木陰で旅人が休息できるように配慮され、ひとときの憩いの場でもあった。榎が植えられ、緑陰を供する風情を保ち、現在も東海道を歩く見学者の道標ともなっている。地元では清掃や草刈り、そして目の前のお堂の管理等を行っている。



図2-2-48 大平一里塚(史跡)

(i)地蔵堂(大平町)

旧東海道を挟んで一里塚の向かい側に地蔵尊を祀った大平西町の地蔵堂がある。町では江戸時代後期の建立と伝わり、一里塚の前にあったものを史跡整備に伴い、昭和13年(1938)に現在地へ移築した。木造平屋建、切妻造、棧瓦葺。地蔵堂の隣には、昭和9年(1934)建立の秋葉山常夜燈がある。



図2-2-49 大平西町の地蔵堂と秋葉山常夜燈

堂内の一体は、地域の子供たちの無事成長を見守る「子安地蔵」で、棟札によると、昭和59年(1984)に再建されたことがわかる。また、背後には長い年月を経て風化した地蔵像も大切に安置されている。もう一体は、東海道を往来する人々の安全を守る「馬頭観音」である。

町内には、東海道を東へ行った薬師寺境内と、一里塚より南へ分岐した国道1号付近の辻に1棟と観音寺付近に2棟の地蔵堂がある。

(ii)現在の大平の地蔵祭り

大平町では、大平西町、大平辻中、大平東町のそれぞれで地蔵祭りが行われている。

大平西町の地蔵祭りは、昭和13年(1938)より地蔵堂が一里塚向かいに移築された現在地で行われ、現在は、町内の子供会の感謝の心を込めた奉仕活動として、毎年6月第1日曜日に行われている。前日に青々とした笹を600本切り出し、小学生の子供たちが「交通安全」「家内安全」と書いた紙と折紙を吊るし、笹を飾りつける。

当日は、朝から帽子と前掛けを新しくした地蔵尊にお供えをし、観音寺の尼僧の読経と共

にお勤めをする。その後、子供たちは近所の家々に笹を配り、志を受けて回る。「東海愛知新聞(平成25年(2013)5月31日)」には、地元では明治期から行われていると伝わり、昭和10年代に参加していたという市民の声が紹介されている。

昭和30年代には、子供から子供に受け継がれる行事となった。祭りの日が近づくと、近くを流れる大平川(乙川)へ行き、良い音のする石を探し合い、当日は地藏堂の前に^{むしろ}笹を敷き、往来の人々に向かって「おローソクは一丁ころごしであがります」「チン、チン」と、大平川(乙川)で拾ってきた石を叩いた。地藏堂の前にある手洗水盤は、子供たちが叩いたことによる窪みがみられる。また、『新編郷土誌「男川」(平成12年(2000))』でも、古くから伝わる地域の祭りとして紹介されている。

^{おおひらつじなか}大平辻中でも、観音寺の尼僧を招き子供たちが3つの地藏堂にお参りをする。

大平東町では、薬師寺境内の地藏堂で7月第1日曜日に地藏祭りを行う。「東^{ひがしく}区延命地藏尊」と彫られた木版を赤と緑で半紙に押し、川沿いで採ってきた竹に吊るす。この竹飾りを子供たちが鉦を鳴らしながら近所に配り、志を受けて回った。10年程前からは、竹が入手困難になったため、半紙のみを配るようになった。

現在も、この伝統行事は子供会の奉仕活動として受け継がれているほか、常時、仏花が絶えることなく供えられていて、歴史的な街道の遺構や建造物等と次代を担う若者が地域の伝統行事を受け継ぐ姿とが相まって、昔ながらの集落の一体感を感じさせる、この地域独自の雰囲気を感じられる。

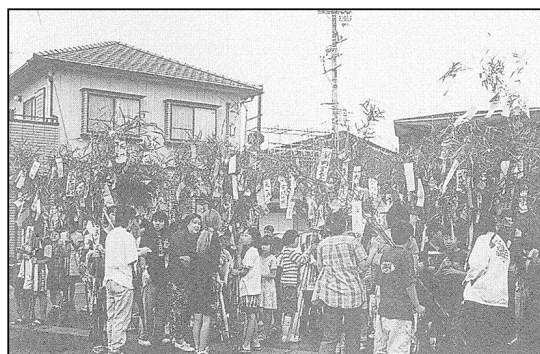


図2-2-50 大平西町の地藏祭り



図2-2-51 「東区延命地藏尊」木版と半紙

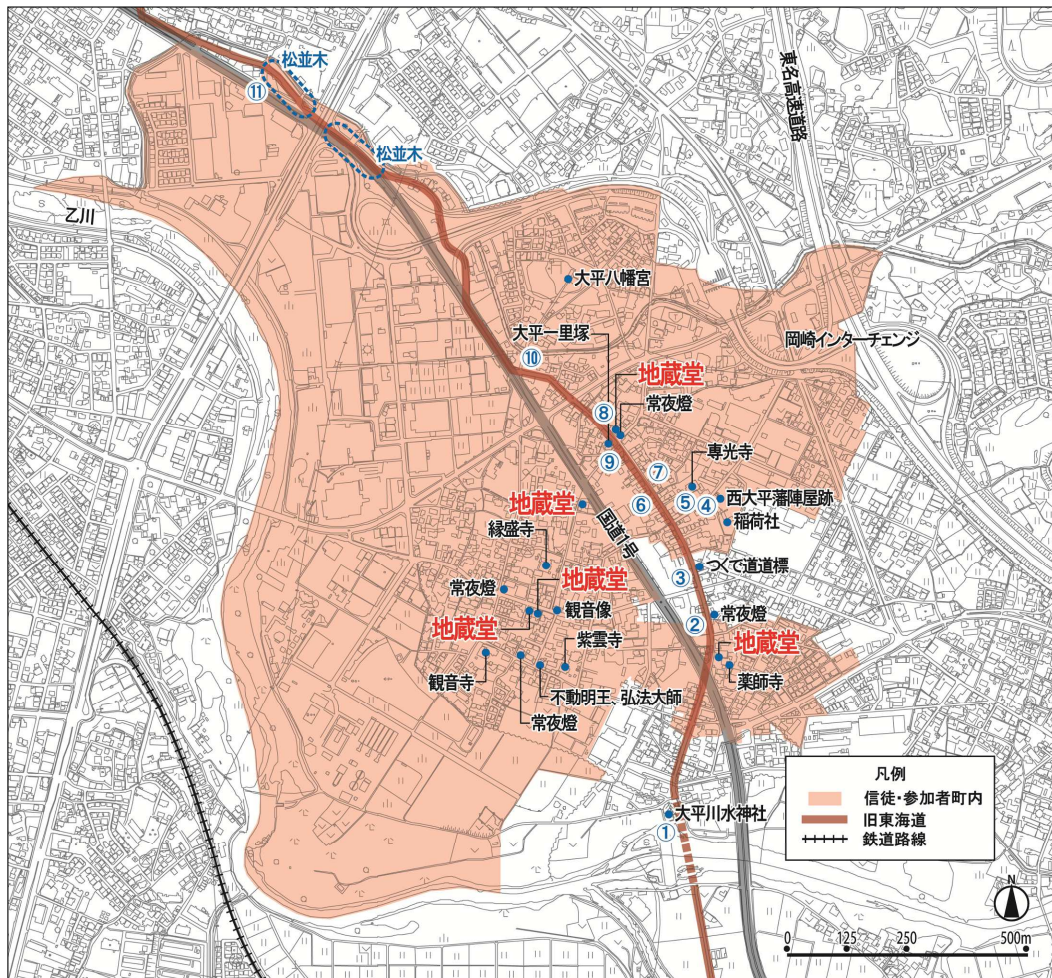


図2-2-52 大平一里塚・地藏堂と市街地の状況

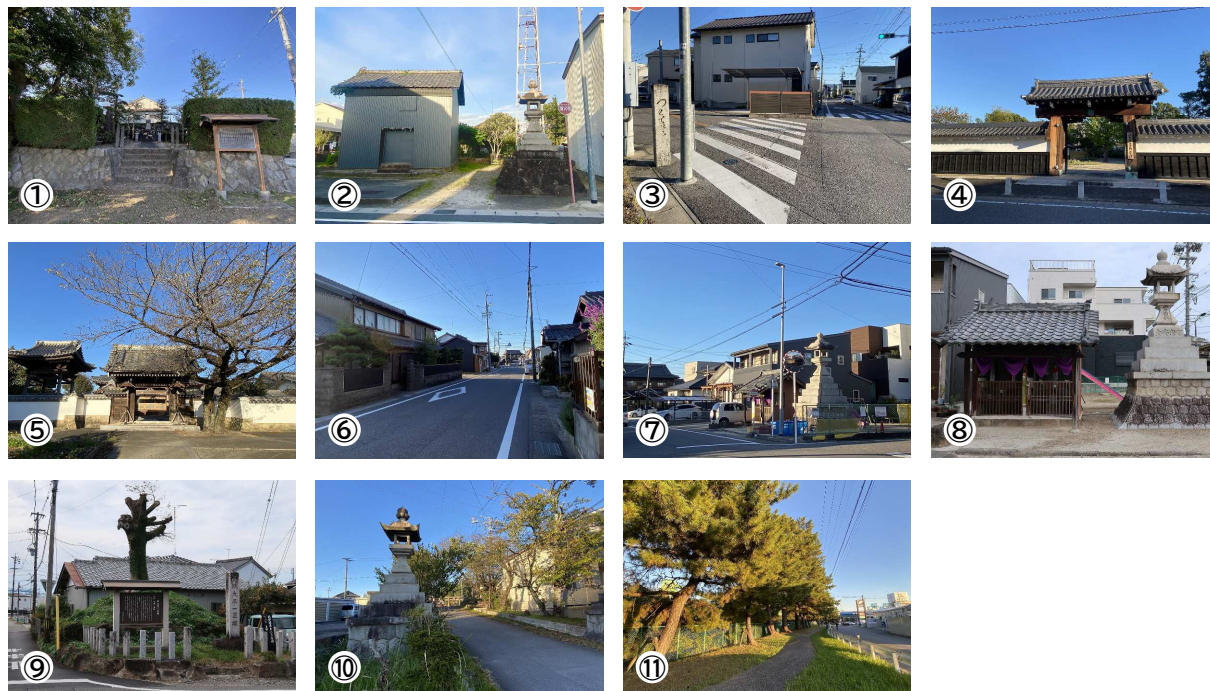


図2-2-53 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

このほか、岡町でも地蔵祭りが行われている。岡町は、東海道と乙川が近接する地域であり、丸山古墳群と丸山廃寺が連なる対岸にあたる。中世には鎌倉街道の宿として作岡宿^{つくりおか}があり、現在も岡町字作岡の地名が残されている。また、天正13年(1585)の家康公上洛時の宿所(岡御殿)となった岡城跡もあり、交通の要衝に開けた町である。近世には、岡町の^{かんぼさき}神馬崎に東海道藤川宿と岡崎宿間の立場が置かれていた。



図2-2-54 阿弥陀寺と地藏堂

神馬崎(阿弥陀寺)の地藏祭りは、各町内会等の人々により、毎年8月24日に近い土曜日に行われる。小学生の子供たちがお参りの1週間ほど前に「南無阿弥陀仏」と書いた習字紙を笹につけ、道沿いに立てていく。お供えの線香やお金も集めて回る。当日は、地藏堂前に提灯を飾ってお供えをし、阿弥陀寺の尼僧の読経に合わせ、子供たちがお参りをする。寺伝によれば戦前より行われ、昭和30年(1955)頃には男児のみが参加しておこもりも行われていたが、30年ほど前から宿泊は行われなくなり、近年では女兒も参加している。祭礼後にはお供えの菓子等が子供たちに配られる。



図2-2-55 岡町野々宮の地藏堂

岡町の西側、野々宮^{いっしき}、一色、作岡でも、各集落の辻に立つ地藏堂で地藏祭りが町内会等により毎年行われており、『みあい 学区の概要(昭和33年(1958))』では、「地藏尊縁日」として記載されている。西側地区では、田植え時期の5月の水路清掃後に、文化2年(1805)銘の馬頭観音と地藏像の祀られる地藏堂へお参りが行われる。野々宮地区では、地藏祭り独自の世話役があり、昭和3年(1928)に子供連により建てられた地藏尊の祭りは、大人も多く集まる行事となっている。一色地区では、慶応2年(1866)銘のある地藏尊に彩色が施される。作岡地区では、宿となる家が世話役を一手に引き受け、子供たちが集まり昼食をとる。どの地藏祭りにも阿弥陀寺の尼僧が読経に招かれ、街道沿いの寺院と各地区とがつながりを持っている。

集落の子供たちと街道を行き交う人々を見守り続ける各地域の地藏に、子供たちが集い、感謝する行事が変わらずに続けられており、長い歴史の中で地元根付いた伝統が感じられる。

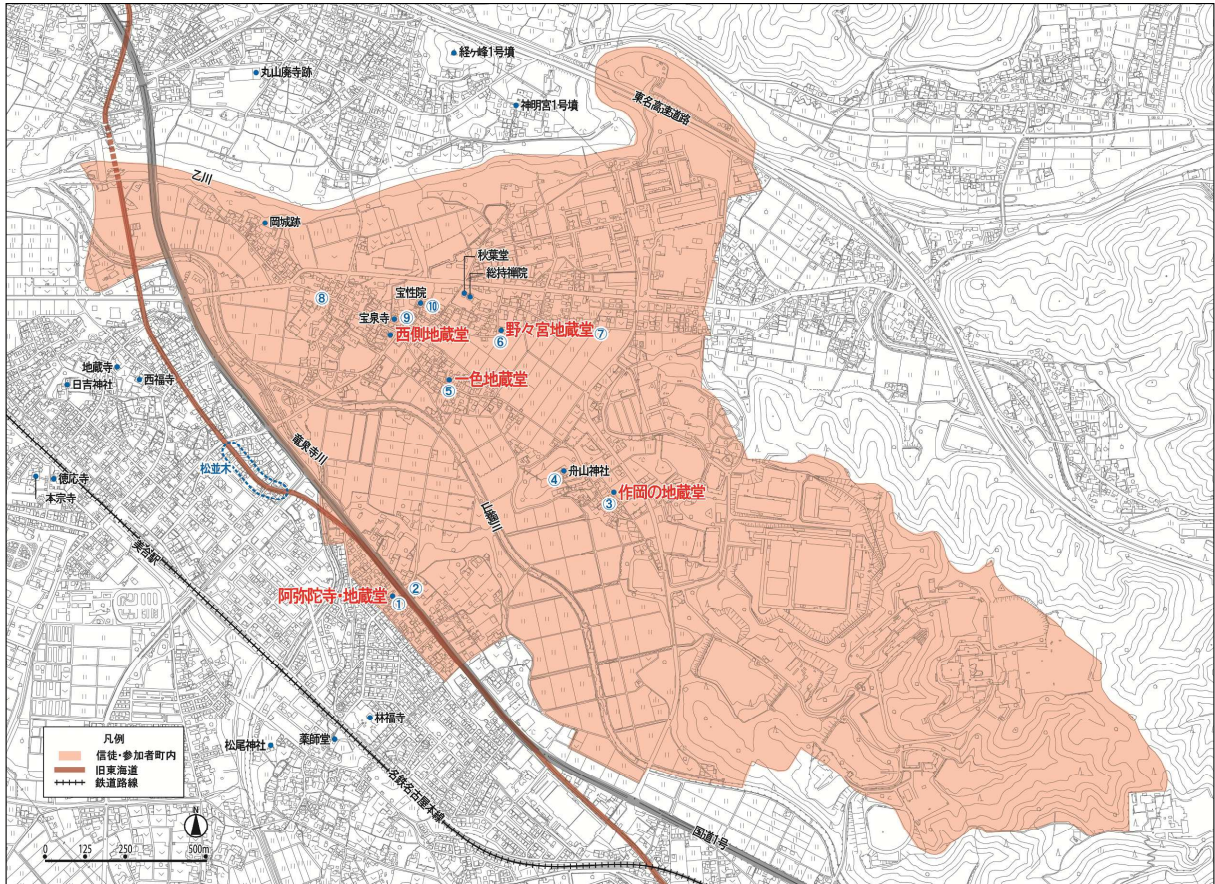


図2-2-56 岡町の地藏祭り総寺禪院の秋葉山大祭火渡りと市街地の状況

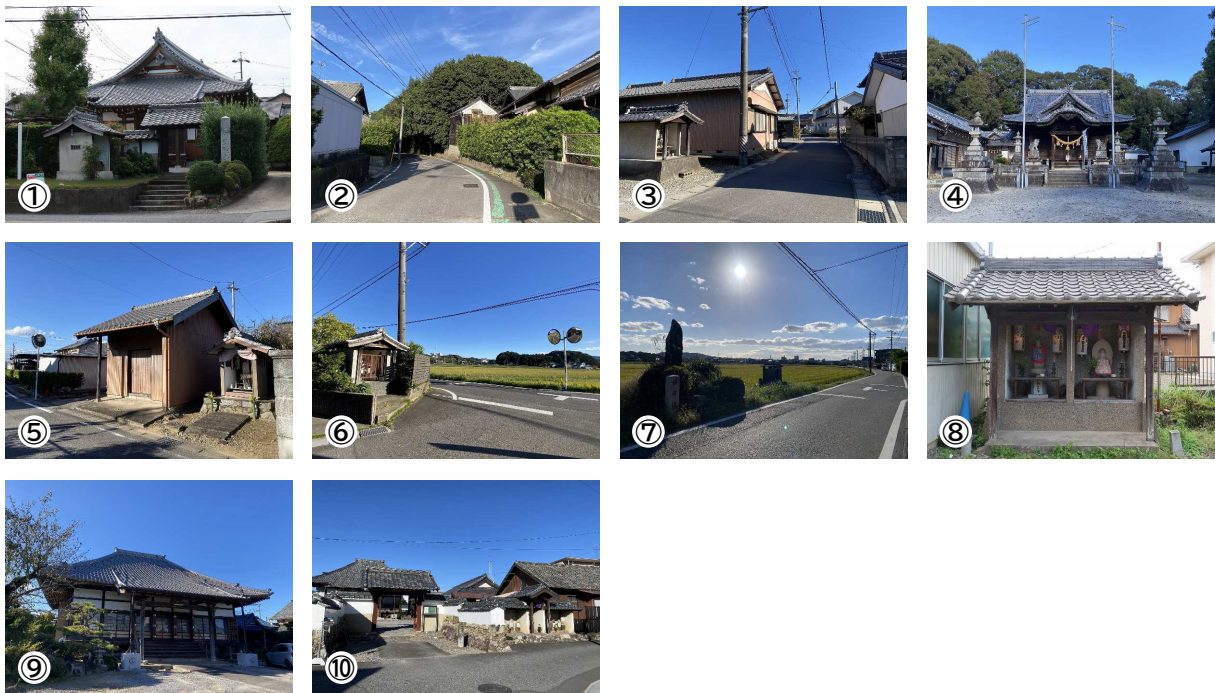


図2-2-57 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

オ.矢作神社の祭礼

a.矢作神社

矢作町の矢作神社には、「矢作」の地名の由来とされる日本武尊やまとたけるのみことの伝承がある竹藪が残る。主祭神は素盞鳴命すさのおのみこと。

伝説では、「東征の折通りかかった、日本武尊に住民が、川の東に住む賊に苦しめられていることを訴えた。日本武尊に命ぜられた矢作部やはぎべたちは矢を作ろうとするが、竹の生えている川の中州まで行けない。突然一匹の蝶が人の姿となり、竹を切り取ってきてくれた。矢作部たちは1万本の矢を作り、日本武尊は軍神素盞鳴命ぐんしんすさのおのみことを祀り戦勝を祈願し、賊を滅ぼした。それ以来、神社は矢作神社と呼ばれた」とされる。

応安3年～永和元年(1370～1375)のころ、兵火にかかり、烏有に帰し、天文年間(1532～1554)に岡崎城主松平広忠が祠を今の字祇園に再建したが、天正年間(1573～1591)の堤防決潰により流失したため、神殿を宝珠稲荷に合祀した。棟札より、社殿を延宝3年(1675)に建立し、宝暦12年(1762)に本殿、明治35年(1902)に拝殿を再建していることがわかる。本殿は、木造平屋建て、入母屋造、棧瓦葺で、拝殿は、木造平屋建て、切妻造、棧瓦葺である。近世には「牛頭天王」(享和2年(1802)の村差出帳)と呼ばれ、神社下の土場どば(舟着き場)を天王土場と称する。近世の矢作橋架け換えのとき、諸大名や普請奉行は当社に「矢作橋杭打ち図」「矢作橋設計図」等の絵馬(市有形民俗文化財)を奉納し工事成功を祈願している。その他水運業者等の絵馬の奉納が多い。また、戦前には、海軍の巡洋艦に「矢矧」の名が冠され、武神を祀ることで広く信仰を集めた。

b.矢作神社の祭礼の歴史

矢作神社の祭礼は、以前は7月中旬に行う夏祭りで、現在は毎年10月1・2日が祭礼日である。祇園祭と同様に山車加わる。

西中之切(矢作三区)の山車(市指定有形民俗文化財)は、旧来の簡素なものから天保10年(1839)に新造され、前棚に記された墨書から、山車は6月に完成し、彫刻師は名古屋の瀬川治助せがわじ(重定)、総頭領は岡崎城下材木町の大山庄八として、木地師や箔置師等岡崎の職人集団で作っていることがわかる。また、東中之切(矢作二区)の山車(市指定有形民俗文化財)は、文化11年(1814)作(天保11年(1840)塗り上げ彩色)で、墨書銘より天保11年(1840)に上山が大山庄八により築造され、さらに、文久元年(1861)改造時とみられる前棚の檀箱彫物だんばこに「瀬川」「重光」の印型彫が認められ、より壮麗な姿へと改修が重ねられたことがうかがえる。い



図2-2-58 矢作神社

ずれの山車も江戸時代後期に作られ、この頃には祭りが行われていたと考えられている。

各山車の正面と上段栞など随所に施された彫刻には全てに金箔が押され、丸柱等は黒漆塗りで、幕の金銀色系による刺繍と相まって華麗荘厳である。戦時中は額田地区の桜井寺町に三区の飾り物等を疎開させ、車輪等は岡崎空襲で焼失したものの戦後復元し、大切に保管をしている。

c.現在の祭礼

10月1・2日の祭礼日には、江戸時代末期に各氏子町の人々により作られた祭礼山車2台が山車蔵の前で飾り付けられる。祭礼が週末となる年は2日目に山車の巡行がある。矢作川沿いの矢作神社より出立し、氏子町の人々が曳く華麗な2層式の山車が秋空の下、旧東海道のまちなみを進む。花の撓^{とう}で有名な誓願寺門前を過ぎ『三河国内神名帳』(平安時代中期以降編さん)に名のある竊樹^{ひそこ}神社で折り返し、国道1号を超えて矢作橋駅前まで曳きまわす。道中には山車上の囃子方のゆらりと練るさまを表した文化文政以来とされる曲を始め、道行きの緩急に合わせた囃子が鳴り響く。

華麗荘厳な山車と囃子がよく合い、矢作神社の祭礼ならではの晴れやかな祭りの風情が感じられる。



図2-2-59 祭礼山車(令和5年(2023))



図2-2-60 祭礼山車(矢作三区)(平成28年(2016))



図2-2-61 祭礼山車(矢作二区)(令和5年(2023))

⁷ 5月8日熱田神宮の豊年祭の田所、畠所に行き、豊年絵図を受けてツクリモノを再現し、近郊の農家が見に来て作物の豊凶を占う。「おためし」ともいう。

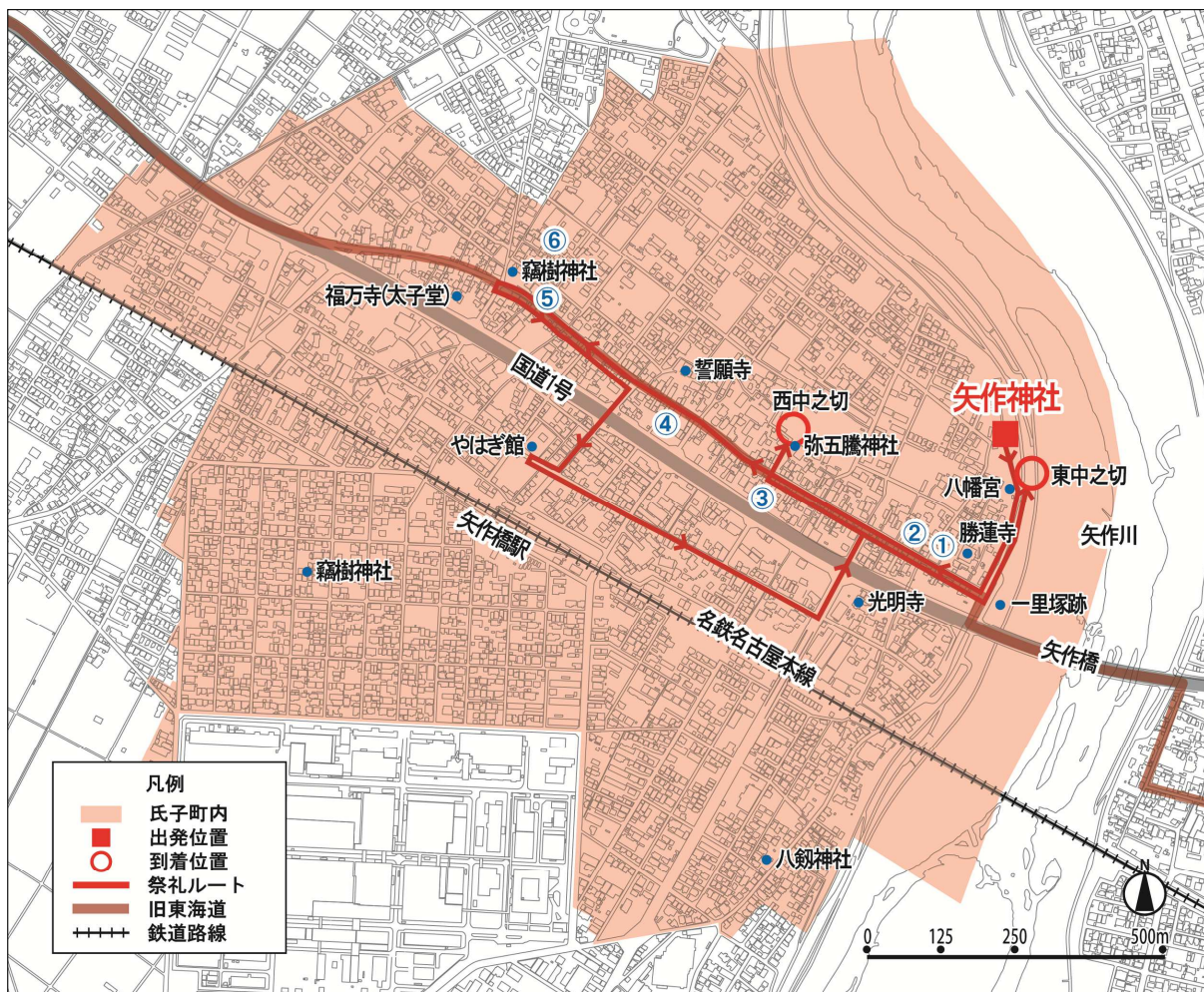


図2-2-62 矢作神社の祭礼山車の巡行図と市街地の状況

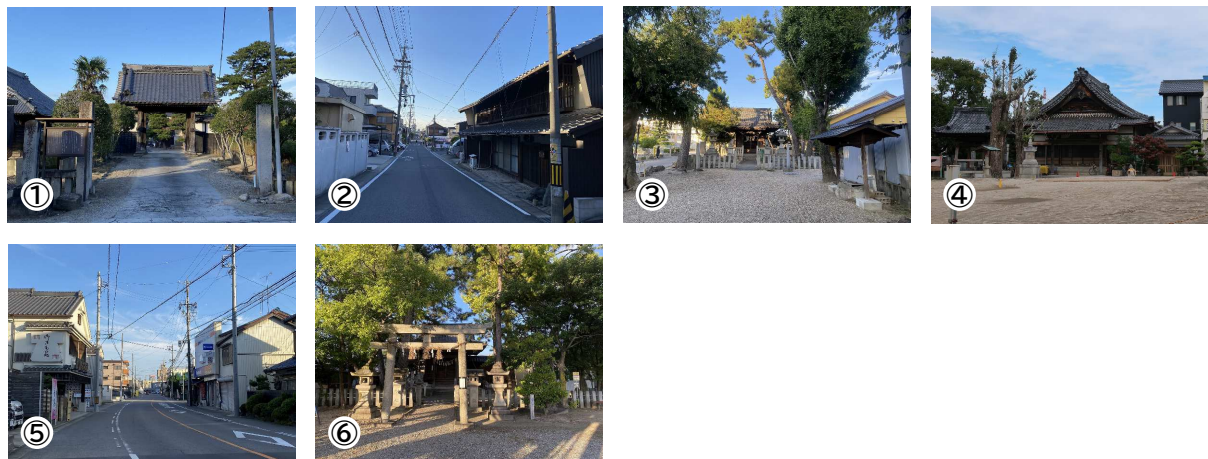


図2-2-63 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

カ.藤川宿における地域団体のまちづくり活動

市を東西に貫く東海道沿いには、街道を往来する旅人を日差しや寒風から守るために植えられた松並木や、一里塚、常夜燈又は道標など、東海道を特徴づける史跡も多く残されている。市内の東海道松並木は、東端の本宿町から西へ、デンデンガッサリが行われる舞木町、37番目の宿場町「藤川宿」のまちなみが残る藤川町、美合町、岡崎宿東の東名高速道路岡崎インターチェンジ付近の大平町に残され、旧東海道の位置

と風情を伝えている。岡崎で見られる松並木のマツは「みかわくろまつ」と名付けられ、昭和46年(1971)に市民投票によって岡崎市の木に決定された。人々によって大切に手入れされている松並木は、緑と木陰が目涼ませ、往時の東海道の風情を感じさせる風物詩となっている。特に、藤川の松並木(県指定天然記念物)は、旧東海道の両側約1キロメートルの間に約90本のクロマツが道の両側に並び、往時の旅の風情を漂わせ、見応えがある。



図2-2-64 藤川の松並木(県指定天然記念物)

a.藤川宿

藤川は、慶長6年(1601)に家康公により伝馬朱印状が発給され、宿場町として栄えた。当初はおよそ5町45間(約630メートル)の小さな宿場であったが、人馬の不足を補うために慶安元年(1648)に東隣の舞木村字市場を加宿し、9町20間(約1,020メートル)と規模を大きくした。幕末の資料によると、本陣と脇本陣が各1軒、旅籠屋が36軒あった。藤川宿脇本陣跡(市指定史跡)の東海道に面した棟門は、享保4年(1719)



図2-2-65 藤川宿資料館(脇本陣跡)

の大火の後に再建され、江戸時代の名残を留め、歴史を物語る貴重な遺構となっている。平成2年(1990)には、藤川宿脇本陣跡に、藤川宿資料館が建てられ、市指定有形文化財である高札等こうさつが展示されている。江戸時代の参勤交代の大名を迎えた藤川宿本陣跡は、平成25年度(2013)に「藤川宿本陣跡広場」として整備された。裏手の石垣がよく残り、国道1号、名鉄名古屋本線からも眺められる。

格子のある町家も各所に見られ、街道の風景をつくっている。旧野村家住宅(米屋)は、藤川宿内で最大級の規模の町家建築である。昭和25～30年(1950～1955)頃の主屋の大屋根の修理の際、天保12年(1841)の棟札が発見されたことから、江戸時代後期の建築と推定されている。木造つし2階建て、桁行6間半(約11.7メートル)、梁間9間(約16.2メートル)、切妻造、棧瓦葺。旧東海道に面する正面の外壁の仕上げに、漆喰塗りや木組格子、妻西側の下部になまこ壁、2階部分に袖壁がみられるなど、町家の面影を一部にとどめており、内部は日本の伝統建築である堅牢な柱や梁の構造で、広い土間などに当時の暮らしを十分に偲ぶことができる。旧平岡家住宅(銭屋)は、文政年間(1818～1830)の建築と考えられており、明治33年(1900)の屋敷図面が残されている。木造つし2階建て、桁行6間(約10.8メートル)、梁間6間(約10.8メートル)、切妻造、棧瓦葺。建物後半は腐朽により失われたが、建物前半には、建築当初の柱、梁等の構造材が残され、建物正面には、格子構え、柱間装置、つし2階軒下等、明治期以降の意匠材が残されており、藤川の近代の風景として長く人々に親しまれてきた町家である。

また、藤川宿は、古くから穂が紫色をした珍しい「むらさき麦」が栽培されており、江戸時代の『東海道名所記』に記録されているほか、十王堂境内には、寛政5年(1793)再建と刻まれた松尾芭蕉の句碑「爰も三河 むらさき麦の かきつはた」がある。

藤川宿を抜けると、道が二手に分かれ、右が旧東海道藤川の松並木、左が土呂(現在の福岡町)・吉良(西尾市)方面へと続く吉良道となっている。分岐地点には、「文化11年(1814)建之」と刻まれた吉良道の道標が立ち、古くからこの辺りが交通の結節点として大きな意味をもっていたことがわかる。



図2-2-66 旧野村家住宅(米屋)



図2-2-67 旧平岡家住宅(銭屋)



図2-2-68 吉良道道標

b.地域団体によるまちづくり活動

昭和38年(1963)頃から、藤川の老人クラブや地域のまちづくりを行う有志らにより、松並木の保護活動が行われ、その様子は昭和50年(1975)頃の写真からも確認できる。現在は、藤花荘(障がい者支援施設)利用者の協力で熱心に清掃活動が行われている。また、有志らの活動は、松尾芭蕉没後300年となった平成6年(1994)に、むらさき麦の復活栽培を始めるなど、地域のまちづくり活動に発展し、平成7年(1995)に「藤川宿まちづくり研究会」を設立、その後、平成21年(2009)に「藤川まちづくり協議会」と改称した。同年～平成29年(2018)に行われた、旧野村家住宅(米屋)の一般公開や「小箱ショップ・むらさき小町」の開店といった、宿場文化財の積極的な保全・活用の取組みを始め、「藤川宿を詠む」俳句募集やむらさき麦まつりの開催など、街道沿いの寺社や歴史的な建造物を背景に、むらさき麦を始めとする、地域の歴史や文化を後世に伝えるための様々な活動が行われている。

藤川まちづくり協議会の活動は、地元の幼稚園から大学、企業まで、多様な世代と連携して取り組まれており、藤川宿ならではの歴史や伝統、文化を誇りに思い、次世代に継承していく強い意志が感じられる。



図2-2-69 藤川の松並木の保護活動(昭和50年(1975)頃)



図2-2-70 藤川の松並木の清掃活動

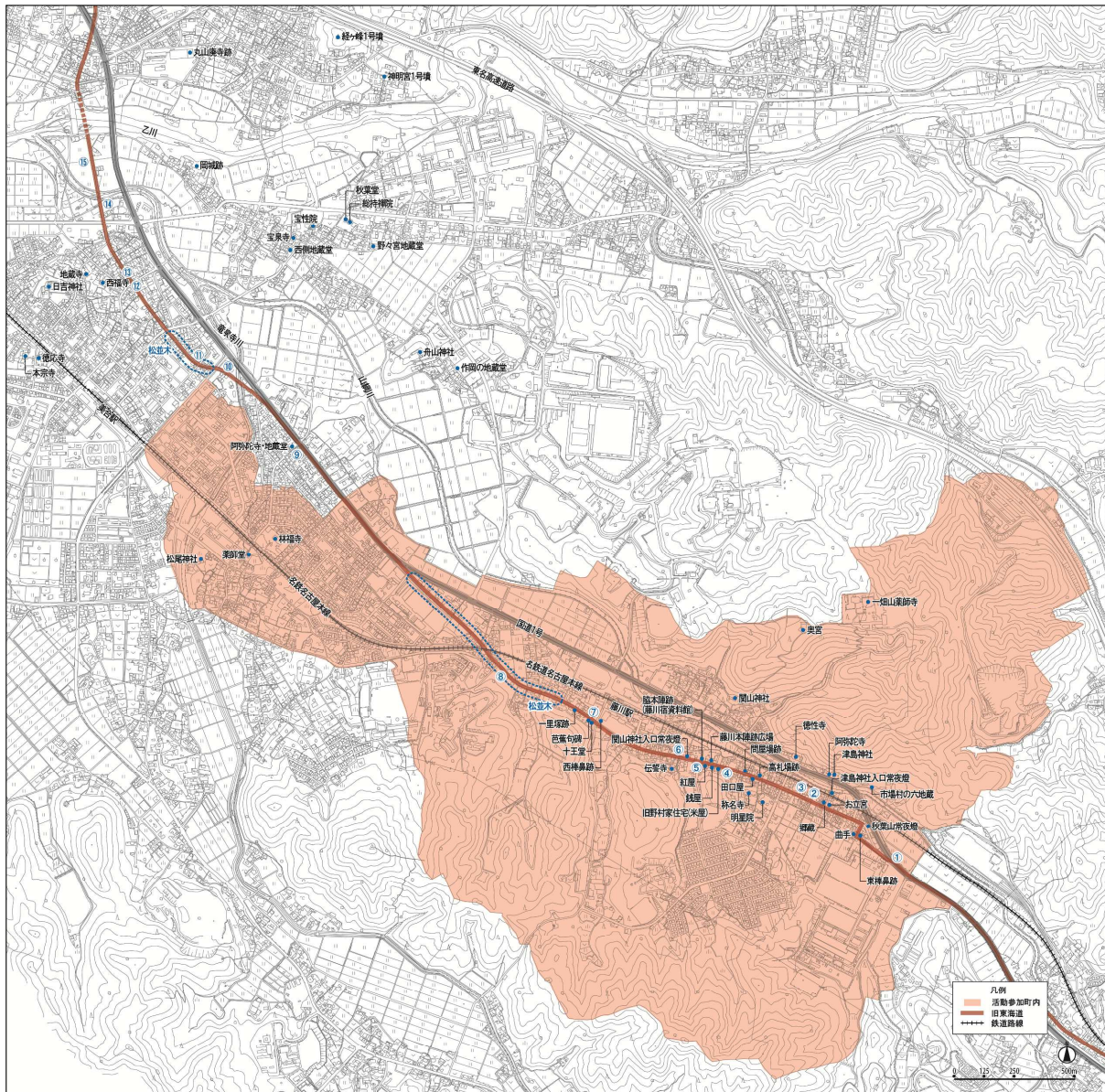


図2-2-71 松並木と地域団体による保護活動と市街地の状況



図2-2-72 周辺市街地の景観(令和7年(2025))

③まとめ

東海道を舞台に、各地で行われる祭礼等と、祭礼等を大切に継承してきた人々からは、地域への深い愛着と故郷への誇りが感じられる。

(5)おわりに

市域を南東から北西へ縦断する東海道は、市域を通る古くからの街道の中でも、ことに市民に親しまれている歴史ある道である。東海道を通して人や物、情報が往来し、新しい文化が本市域にもたらされた。現在、幹線道路としての役割は並行する国道1号が担っているが、中心市街地を除いて、ほぼ東海道と並行して私鉄が敷設されたことから、街道沿いの集落では市街地化が進み、その中を通り抜けている東海道は、人々の生活道路として今なおその往来は活発である。

東海道沿いの市街地においては、江戸時代に宿場等として栄えた歴史が現在の地域コミュニティを形成する上でも重要な役割を果たし、継承されている信仰行事等が地域コミュニティを更に強固なものにしている。周囲に広がる山並み等を背景として、昔ながらの風情を備

えた建造物が残る地区が続き、路傍には灯籠などの石造物が点在し、街道沿いに残る古くから信仰を集めてきた寺社の歴史的な建造物と、古くから伝わる信仰行事等の人々の活動が相まって、自然豊かで趣のある街道の面影を今に伝える良好な歴史的景観を形成している。

四季折々に町々で催される祭礼では、旧東海道を舞台に、ハレの日に揃いの法被等の装束に身を包んだ人々が力を合わせ、工芸技術の集約された山車を曳き、また提灯を灯し、厳かに行列をすすめている。ここには街道筋に生きる町衆の誇りと地域の人々のつながりが表れている。東海道を舞台とする歴史と伝統を伝え、三河の穏やかな文化の彩りを添え、風情を醸し出しているこれらの祭礼等と民俗的行事の光景は、本市の歴史文化の一端を象徴する歴史的風致を形成している。

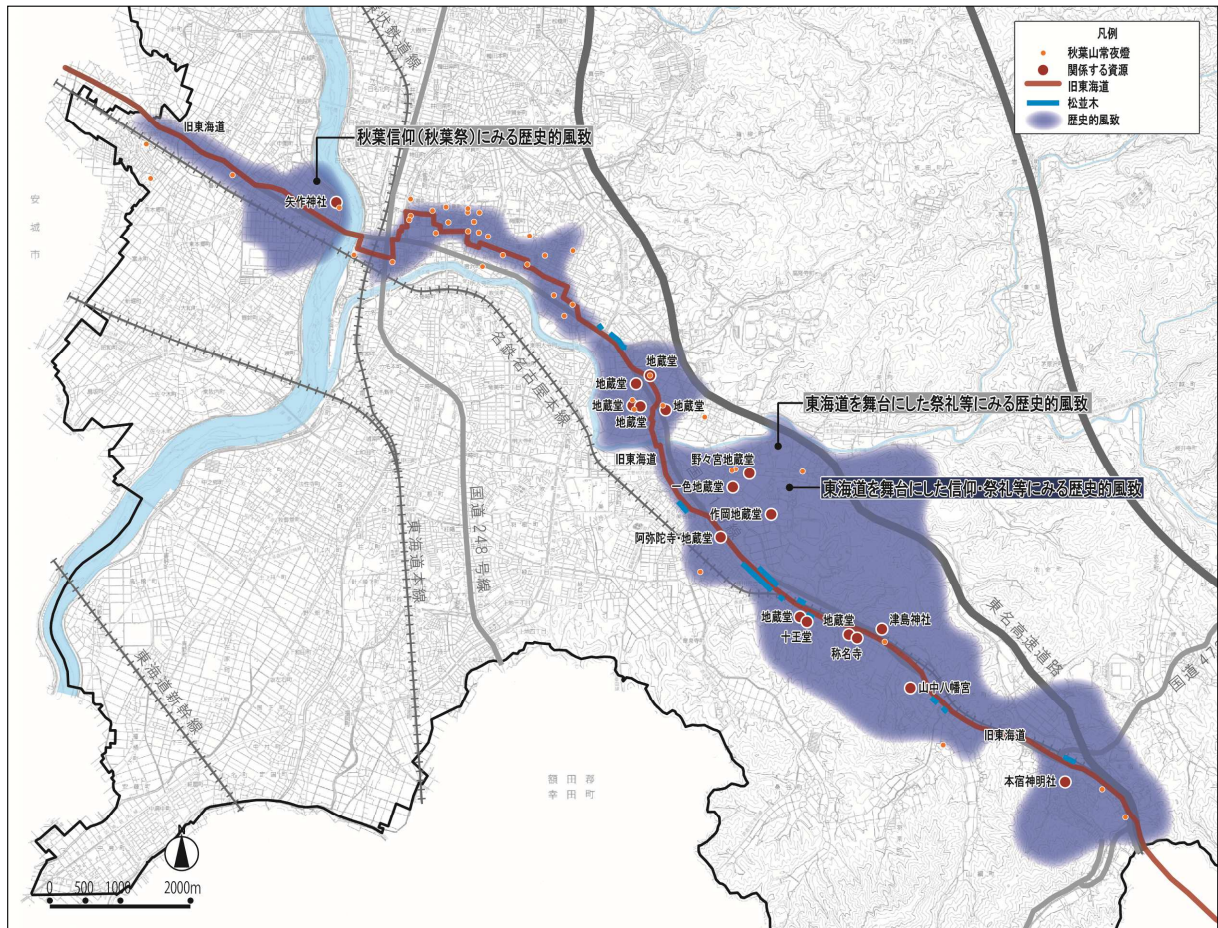


図2-2-73 東海道を舞台にした信仰・祭礼等にみる歴史的風致の範囲



藤川地区の教育活動

藤川小学校では、平成13年度(2001)の藤川宿開宿400年記念祭を機に、6年生が総合的な学習の時間に地域の題材である藤川宿を教材化した学習に取り組み、平成21年度(2009)には、学習内容をパネル化して旧東海道沿いに現存する町屋建築の歴史的建造物である旧野村家住宅(米屋)に常設展示した。平成22年度(2010)には、藤川地区内の大学である愛知産業大学の学生と連携して、学区の地図の立体模型の製作に取り組み、平成23年度(2011)は、「藤川ガイドになろう」という学習目標のもと、藤川宿を中心とした学区探検を繰り返し行い、その成果を「ガイドブック」、「缶バッジ」、「旧野村家住宅(米屋)のミニチュア模型」、「むらさき麦の食料品等商品化提案パネル」、「町屋屋号の表札」などにまとめた。このような総合学習を通して、藤川地区の児童は宿場町としての地域固有の歴史を学び、藤川まちづくり協議会などの地元団体と連携しながら、地区全体で積極的にまちづくりに参画していこうという風土が広がっている。



図2-2-74 総合学習(藤川ガイド)の様子



図2-2-75 総合学習(藤川ガイド)の様子